

幼児の Body Image についての研究

体育学専攻 瀧澤 弘光

論文指導教員 太田 鐵男教授

合格年月日 昭和61年3月4日

論文審査委員

斎藤定雄

千葉祇典

高橋 俊哉

目 次

第 1 章 緒 言 1

第 2 章 関連文献の考証 5

第 1 節 Body Image の概念 5

第 2 節 描画法 10

第 3 節 人物画と Body Image 14

第 4 節 体内 Image 20

第 3 章 本研究の目的 32

第 4 章 実験方法 34

第 5 章 結 果 43

第 6 章 考 察 70

第 7 章 結 論 86

第 8 章 要 約 88

謝 辞

文 献

欧文要約

図・表

第 1 章 緒 言

教育の目的は、人格の完成をめざすものである。²²⁾ すなわち、personalityの形成というところにあるとすれば、体育の究極的な目的も、personalityの発達及び形成をめざすものであると考えられる。

従って、体育においても、personalityの形成過程にかかわる諸問題は、非常に重要であると思われる。

Kane²⁵⁾ は、体育の指導者が、身体や体力の発達に格別な関心をもち、それらが、personalityに与える効果について気づいており、また、personalityやperformanceの個人差を解明しようとする傾向がみられ、さらに、personalityが、どの程度、身体的能力差の要因となつてゐるかということに関心を向けてゐると述べてゐる。

このpersonalityの形成において、最も大切な時期が、幼児期であると考えられてゐる。

子供の性格や、幼い頃の重要な経験が、人

生において決定的な重要性をもつと考えている Freud を始めとする多くの研究者達は、5歳までの性格、或いは、重要な経験が、ほとんどのその後、性格に決定的な影響を与えていると考えており、それ故、「子供は大人の父である⁴⁰⁾」と述べている。

また、Hartley¹⁹⁾ は、個人の性格構造の発達における、幼稚園や小学校低学年という発達初期の果てに重要性が広く認められていると述べている。

そこで、幼児期の personality を捉えることが重要であると考えられる。

心理学の分野では、personality を単に、個性や性格という意味だけでなく、個人の持つ特有の思想、態度、興味、感情等を総称して用いている。

この personality というものが、身体像 (Body Image : 以下 Body Image とする)^{10) 32)} に反映されることを示唆されている。特に、Schilder は、Body Image が、personality の中核をなす

ものである³⁶⁾と述べている。

また, SecordとJourard³⁵⁾は, Body Image の一つの側面である身体に対する態度が, 包括的な personality 理論にと, 極めて重要であると述べている。

Body Image とは自己の身体についての概念である¹⁾と考えられており, Fisher⁹⁾は, Body Image と personality の接点, を次のように述べている。

自己の身体についての感情は, その人の自己概念や, 他人との関わり方について多くのことを知らせてくれる。そこには, 個人が自己以外の事物とは対照的に, 自己の身体についての独自の知覚様式をもっているという明証がある。このように, Body Image や身体概念 (Body Concept) は, 重要な個人的感情や, 価値, つまり, personality を投影するスクリーンなにし, 標的の役割を果たす。

さらに, 彼⁹⁾は, 子供のもつ自己の身体につ

この概念が, personality を形成する諸能力の相互作用により, 成長するにつれて発達し, 分化すると述べている。

以上のように, personality 形成における幼児期の重要性が叫ばれ, また, personality と Body Image の関連性が示唆されている。

従って, 幼児の Body Image を捉えることにより, personality の基礎的側面を明らかにすることが重要であると考えられる。

第2章 関連文献の考証

第1節 Body Image の概念

Body Image の研究は、脳病理学から始まり、精神医学や心理学の分野にまで広がっている。

Kane²⁵⁾ や Whiting⁴²⁾ らが、示唆しているように、Body Image は、Body Perception, Body Schema, Body Concept, Body Feeling, Body Awareness, Body Sensation 等とほとんど同義的に用いられており、状況に応じて、単に身体に関する概念を示したり、また、身体についての意識内容を示したりするものであると考えられる。

Body Image についての研究の第一歩は、16世紀にまで、さかのぼることが出来る。当時、フランスの内科医であり、外科医でもある Paré は、切断した手、足、乳房、陰茎、その他の身体部位が、未だに元通りに残っているかのように感じられる幻影肢（幻肢, Phantom Limb）を初めて報告している。¹⁶⁾

20世紀に入り、フランスの神経学者 Babinski は、脳血管疾患に伴う左半身不随の患者が、自らの不能が明瞭であるにもかかわらず、麻痺していることを認めようとしない疾病否認 (Anosognosia) について報告している。²⁶⁾

このような幻影肢、疾病否認などの身体経験の変調を説明するものとして、Body Image あるいは、Body Schema (身体図式) の概念が導入されている。

これ以降、様々な研究者達により、Body Image の定義づけがなされてきている。

Head²⁰⁾ は、四肢の受容器の手掛りと身体の位置や調子や動きについての感覚系からの手掛りから、身体概念、あるいは、Schema (図式) を形成するために使われることを見い出し、Schema は、大脳知覚野の損傷により失われることを報告している。

Head の Body Schema に従って、Schilder³²⁾ は、Body Schema を、各人がもっている自己の身体についての空間像であると述べ、後に、

Body Schema と同じ概念として、初めて、Body Image という術語を用いている。

³²⁾彼は、自分の身体についての概念を形成するための視覚の重要性を強調している。しかしながら、視覚を含むすべての感覚が、Body Image の形成に必要なことも指摘している。

Head は、Body Schema を、Schilder は、Body Image という術語をそれぞれ用いているが、身体経験を強調するという点では、共通の見解を示している。

³⁴⁾Scott は、Body Image ではなく、Head と同様に、Body Schema という術語を用いている。

³⁴⁾彼は、Body Schema が、外的及び内的な経験の統合であると考えている。つまり、体表面から、その内部へ、また、体表面から宇宙。果てまで広がる身体の感覚、知覚、概念、情動、記憶、及び Image の多少とも意識的な統合であると述べ、Body Schema の力動性を強調している。

以上が、精神医学の分野における Body Image の概念構成の背景である。

以下では、心理学の分野における Body Image の概念構成の背景を述べる。

Fisher と Cleveland¹⁰⁾ は、自己と外界との区別をする身体経験を Body Image Boundary (身体像境界) とし、体表面に拡がる身体経験の分化を定義している。

Federn⁸⁾ は、Body Image と Body Schema を別々に定義している。彼は、Body Image を身体意識の中へのありわれで、常に変化する Image とし、Body Schema を自己の身体に関する恒常的な知識としており、さらに、状況の変化に左右されずに持続される自己の身体意識を Body Ego (身体自我) と定義している。

また、Fisher は、身体経験と personality の関連性を明らかにしている。彼は、Body Image が独自のものであり、人格的、象徴的なものである³⁶⁾ と述べ、さらに、Schilder も、人は、

自分自身の Mental Picture, すなわち, Body Image と関連させ, この Body Image は, 情緒的, 象徴的な意味をも, であり, personality の中核をなすものである³⁶⁾と述べている。

以上のようい, Body Image の概念については, 現在までに, 様々な定義づけがなされてきているが, 必ずしも厳密に定義されているものではない。

しかしながら, 様々な定義づけを包括してみると, Body Image とは, 自己の身体についての概念であり, すべての身体経験により絶えず改変され, 身体の内外部へと拡張するものであると考えることができる。

第2節 描画法

描画法は、元来、personality の測定手段の一つとして位置づけられている。

personality の測定手段は、大きく2つに分類がなされると考えられる。それは、質問紙法と投影法である。

質問紙法とは、被験者が、自らの典型的な行動についての質問に答えたり、また、事物や状況及び人に対する自らの感情を述べたりするものである。

質問紙法は、比較的簡単な質問により行われ、いくつかの尺度を組み合わせる種々の次元から多方面でみようとするもので²³⁾、矢田部ギルフォード性格検査(YG)や、モーズレイ性格検査(MPI: Maudsley Personality Inventory)、特に、種々の精神医学的障害への傾向を明らかにするためのミネソタ多面人格目録(MMPI: Minnesota Multiphasic Personality Inventory 以下、MMPIと略す)や、MMPIを基盤として、精神医学的疾患

とはかかわりなく用いられるように標準化され、カリフォルニア心理目録 (CPI : California Psychological Inventory) 等が公刊され使用されている。

質問紙法は、採点が客観的に行なえる利点がある反面、字の読みない者、文章の読解力が不足している者には不向きであり、さらに、自己についての主観的な判断のため、自分をよくみせようとする歪曲が入り込むことがある²³⁾という欠点が指摘されている。従って、文章の読解力が不足している児童には、不向きなものと考えられる。

内容が明確であり、構造化されている質問紙法に対して、抽象的な刺激を与え、被験者に自由な反応を示させる投影法には、紙を二つ折りにして、インクを落とす、そのしみーインクブロットを用いたロールシャッハテスト (Rorschach Technique) がある。また、抽象的な絵を見せることにより、被験者に、物語を連想させる主題統覚テスト (TAT :

Thematic Apperception Test) もある。そして、
これらの投影法の1つとして描画法が存在す
る。

描画法には、人格と環境との相互関係を捉
えようとして、家・木・人の自由画を描かせ
るHTP (House - Tree - Person Test) や、
人物を描かせることにより、むしろ意識さ
れた personality を表出し、自分がこうありた
いと思う人間像や対人関係についての態度を
とらえて評定するDAP (Drawing a Person Test)
がある。また、Goodenough¹⁴⁾ は、子供に男の
人の顔を描かせるDAM (Drawing a Man Test)
を用いて、人物画による知能測定法を考案し
た。さらに、桐原²⁶⁾ は、人物画の発達と知能と
は相関関係のあることを確かめ、年齢3歳以
上9歳以下の子供の知能検査として有効であ
ることを報告している。

以上のように、投影法の中に位置づけられ
ている描画法は、personality の測定方法とし
て、さらに、人物画については、子供の知能

検査として用いられている。

しかしながら、描画法を含む投影法にも問題点が存在する。投影法は、被験者に対する刺激が抽象的なものであるということから、反応が自由であり、多様なものになると考えられる。また、Tyler⁴⁾も、あらゆる投影検査について、一つ言えることは、その妥当性の検証がまだ不完全であり、教師や社会福祉関係の相談員等が直面する実際の場面での個人に対する決定には応用できず、人格の構造と機能について豊富な知識をもつ心理学者にのみ役立つと述べている。

このように、描画法は、personalityの測定技法や子供の知能検査に用いられるという効用がある反面、我々が、個人のpersonalityを評定する際には、客観性が乏しいと考えられる。

第3節 人物画と Body Image

人物描画法を発展させた Machover²⁹⁾は、被験者にとって、人物画の描画過程は、彼自身が認めようと認めまいと描画技術の問題なしに身体のおへてに彼自身を投影し、そして、Body Image の中に現われる意味と態度を投影してゐるものであると述べてゐる。

また、Craddock⁵⁾は、自画像の上に描かれた人間の姿が、その描者にとって知覚される自分の Body Image の表象であると述べてゐる。

このように、Body Image には、personality が反映されるということから、personality 検査として体系化されてゐる描画法を用ゐることにより、Body Image を投影させる試みが報告されてゐる。

Bender と Keeler²⁾は、小児分裂病者の描く自画像には、非常に奇妙なものがあり、彼らは、全身を描くことができない。とり、頸椎と肩のみの姿や、非常に微細な姿、また、腕を左右2個ずつ持つ姿を描いてゐることを報告

している。

Machover²⁹⁾は、紙と鉛筆を与え、“ひとりの人間を描きなさい”という簡単な指示のもとに、精神障害者を対象とした研究で、彼らの病的な徴候が描画に投影されることを報告している。

また、Cruickshank⁶⁾は、肢体不自由者を対象として人物描画法を行なう、としている。両手に奇形をもつ者が、両手を身体のおしりにかくして描画を示したり、下肢両側麻痺の者が不明瞭な脚の描画を示したりすることを報告している。

以上のように、心や身体に何らかのハンディキャップを持つ人々の人物画には、彼らのBody Imageの歪みが投影されることが示唆されている。

HTPテストを発展させたBuck⁴⁾は、描画法は、幼児にと、親しみのあるもので、さらにどんな年齢の者にも、他の題材に比べ親しんで描かれ、描かれなもののについて卒直

で、自由な言語表現が得られると述べている。

さらに、山口⁴³⁾は、Body Image の発達、あるいは、その障害を知るための簡単な検査は、子供に人物画を描かせることであると述べている。

このように、Body Image の測定手段の一つとして、描画法を用いる理由には、話すことと拒絶したり、また、何らかの理由で実験者と話し合えない人に対しては、コミュニケーションが得られ、さらに、絵を描くという施行の容易さから、年齢、性別を問わずに行なうことができるという利点があると考えられる。

従って、言葉の発達が不十分である子供の Body Image の測定手段として描画法を用いることが多い。

Schilder⁴²⁾は、子供が描いた人物像に、彼らの知識や感覚的経験が投影され、少なくとも、心の中に抱いている人間の身体についての Image、即ち、Body Image を表現しており、

その Body Image は、知覚と同じように心の中
の像であると述べている。

子供の描画を用いることにより、知能検査、
いわゆる精神発達の一つの尺度を開発した

Goodenough¹³⁾ は、子供が指の数を多く、そして、
直線を描くという特徴のあることを見い出し、

視覚的な発達と Body Image との間に、何らか
の関係があることを報告している。さらに、

子供の自画像について、顔から手が出ている
という誤り、この描画が非常に多いことも確認
している。

山内¹⁴⁾ は、幼児や精神分裂病者が、頭、顔面
の大きい幼稚な自画像を描き、未熟な Body
Image を示し、特に、精神分裂病者による顔
と手と胸が一体となつた自画像は、彼らの
Body Image の歪みとして理解することができ
ると報告している。

山口¹⁵⁾ も、人物画では、子供は、自分の見
えより、考えたものを描くので、この意
味では、人物画は、その子供の Body Image を

表わしており、その他、知能、感情的要素、運動能力等の要素も関連していると述べている。

また、古谷と Steward¹¹⁾ は、子供の絵が、特有の発達を示す一つの題材であって、知的な発達を表わすと共に、社会的な成熟度や情緒的な状況も反映すると述べている。

さらに、田中³⁹⁾ は、子供の描画を、子供の内面を捉える見方、子供の成長の確認として捉える見方、発達や心の問題を診断する見方の3つに分類している。

以上のように、子供の描画、特に、人物画に Body Image が投影され、それと同時に、様々な発達状況も影響を及ぼすことが確認されている。

従って、心や身体にハンディキャップをもつ人々の不自然な描画は、Body Image の歪みとして捉えることができ、また、子供の描画は、一つの発達段階として Body Image を捉えることができると考えられる。

しかしながら、Swenson³⁷⁾は、ふりいにかける目の荒い道具としてなら、また、適応水準の大きな指標としてならDAPは使うことができると述べている。

また、Gorman¹⁵⁾は、描画法を含めあらゆるBody Imageの測定技法は、ある程度の真実性をもち、述べている。つまり、被験者自身の身体概念の少なくとも、ある一面について、真実の画像を与えてくれると述べている。

従って、Body Imageの測定手段には、投影法や、面接法、質問紙法等があるが、これらは、必ずしも、被験者自身のBody Imageのすべてを投影するものではないと考えられる。

第 4 節 体内 Image

人物画に Body Image を投影させるといふ試みは、Machover²⁹⁾や Goodenough^{13) 14)}に代表される様に、そのほとんど「バート」人の人間を描きなさい」といふ簡単な教示のもとに行なわれている。このような場合には、被験者は、自分の身体の外側の絵を描いている。つまり、視覚を中心とした Body Image (体外 Image) を投影すると考えられる。

その一方で、身体の内側の絵を描かせ、身体内部の Body Image, つまり、体内 Image についての研究も行なわれている。

針生¹⁸⁾は、体内 Image そのものは、いうまでもなく、Body Image の一部をなすものであり、その形成にあたり、それは、視覚的にも、触覚的にも直接的な手掛りとは与えられていない。そして、体内 Image は、体外 Image とは違い、漠然とした有機感覚、獲得された知識などの間接的な情報をもとに推測、想像しなければならないと述べている。

古谷とSteward¹⁾は、視覚を中心とした感覚情報²⁾が、主に、身体の外側のBody Imageの形成に関与し、また、身体内部の感覚情報³⁾が、身体の内側のBody Imageの形成に関与するが、身体内部は見ることはできず、限定された感覚のみに依存せねばならぬために、身体の内側のBody Imageの形成は困難であると述べている。

体内Imageに関する研究は、1925年に初めて発表されている。SchilderとWecksl^{er}⁴⁾は、4～13歳の子供に「身体の内側には何かありますか?」、「皮膚の下には?」、「頭の中には?」等という質問を行なっている。その結果は、年少児の典型的な回答が、身体の内側には食物が入っているというものであり、内臓を答えることがほとんどなく、低年齢になるに従い、このような直接的な経験をしたことの反応が多いというものであり、た。

この研究では、描画法は用いられず、子供を対象にして面接を行なうものである。さら

に、彼らは、身体内部についてゐる彼の知識調査は、多くの精神分析の問題に有益であると述べている。

この研究以降、いくつかの体内 Image についての研究が行なわれている。

Tait と Ascher³⁸⁾ は、身体内部の概念の発達及び、その発達が、病気になる、不時にどのような歪みが生ずるのかとこのことを検証するために、Inside of the Body Test (身体内部テスト：以下、IBT と略す) と考案している。彼らは、精神障害者、一般市民、海軍兵学校入学予定者、内科・外科的疾患の入院患者、小学校6年生を被験者として、IBT を実施している。成人は、平均6~9の内臓を描き、循環器系と消化器系の器官が多く、中でも、心臓を答える頻度が高いこと、また、小学生は、骨格系の器官が多く、生殖器(卵巣等)を省略することから報告されている。そして、精神障害者及び入院患者が、障害のある身体部位を描画に強調する傾向にあることも報告

されてゐる。

OffordとApon³⁰⁾teは、先天性心疾患の子どもと正常な子どもにIBTを実施してゐる。その結果は、心疾患の子どもが、正常な子どもに比べて、比較的大きな心臓を描き、体内器官の数は、より少ない傾向にあり、特に、年少の子どもにおいては、身体内部が心臓でできていると答えることが多くと報告してゐる。さらに、彼らは、心疾患の子どものBody Imageの歪みは、身体の外側よりも、内側の知覚に属してゐることを明らかにしてゐる。

Brumback³⁾も、また、小学校1～6年生にIBTを実施してゐる。小学生は、体内器官の数と描画の複雑さから、学年が上がるにつれて増加する傾向にあり、その中でも、心臓を描く頻度が、最も多く、他に、脳、骨格、肺、血管等を比較的多く描くということと報告してゐる。

彼³⁾らは、IBTによる子どもの身体内部知覚の歪みを、発達初期の段階で見出すことが

子供の身体的、情緒的、知的な障害を発見するために有効であるとして述べている。

以上の3つの研究は、IBTを小学生に実施したものである。IBTは、被験者に、白紙と鉛筆を与え、「身体内部、及び、その中に含まれていゝる器官を描きなさい」という指示のもとに行なわれるものである。

Geller⁽¹²⁾は、急性、または、慢性の何らかの病気で入院経験のある4歳9ヶ月～16歳11ヶ月の子供に、質問紙により、知、てゐるだけ、できるだけにたくさん体内器官の名称をあげるように指示を与え、体内Imageを捉えることを試みている。彼は、体内器官の数、年齢と共に増大し、骨格、血管、心臓、血液、腸の5項目の言及が多く、入院経験（虫垂炎、扁桃腺等）が子供の体内Imageに投影されることとを報告している。

Eiser と Patterson⁽⁷⁾は、6、8、10、12歳の子供に、まず、「身体の内側には何かありまうか」という指示を行ない、白紙に描画を

させ、次に、身体の輪郭が描かれた用紙に、心臓、脳、胃、肺、腎臓、肝臓、膀胱のある場所を示させ、各器官の機能について質問するという方法で、体内 Image を捉えることを試みてゐる。結果は、やはり、年齢と共に、描かれる体内器官の数は多くなり、また、年齢には関係なく、生殖器を描く子供が少ない。さらに、全体的に、心臓、胃、脳、肺の機能は理解されてゐるが、膀胱に関しては、ほとんど理解されてゐないことというものがあ
る。

我が国でも、いくつかの体内 Image についてこの研究が行なわれてゐる。

古谷と Steward¹⁾ は、単純に衣服を着た幼児の輪郭が描かれた全身の絵(身体の外側の絵)と衣服を着てゐない幼児の輪郭が描かれた全身の絵(身体の内側の絵)を考案してゐる。

つまり、身体の外側と内側の2枚の絵を、それぞれ描かせ、さらに、分析が、困難である描画と得点化するという方法を試みてゐる。

る。

Tait と Ascher³⁸⁾ が、病気による体内 Image の歪みを報告している一方で、古谷と Steward¹¹⁾ は、病気の経験に積極的な意味を与え、体内 Image の形成とフロースの観点から捉えることも試みている。

須々達¹¹⁾ は、5、6 歳児に、描画を行なわせ、病気の経験の直後に、再び描画を行ない、身体内部の知識が、確実に増加していることを報告している。また、「小人」が体内に存在しているという幼児独特の空想的な描画が示されたことも報告している。

針生¹⁸⁾ は、幼児から成人に至る被験者に、白紙と人体の輪郭が描かれている 2 枚の用紙を与え、鉛筆で、身体内部を描くように教示を行ない、体内 Image を捉えることを試みている。体内器官の数は、幼児では 4～5 項目程度であり、それも、9～10 歳でピークとなり、それ以降の年齢層で、一時的に増減がみられなくなるが、成人になると再び増加すること

と報告している。また、描かれる体内器官は、すべての被験者において、心臓、脳、骨が一貫して多いことと報告している。特に、幼児では、心臓が主要器官であり、その他には、骨、脳、胃が上位にあるが、身近な体験の範囲内での説明が多い（「あたまのはたろきをするところ」、「ごはんがはい、ここぬる」等）ことも報告している。

岩渕²⁴⁾らは、古谷とStewardと全く同様な方法を用いて、5、6歳児の発達的な検討を行っている。体内器官の数は、男児、女児ともに、6歳児が、5歳児に比べて多く描き、性差については、5歳児、6歳児ともに、男児が、女児に比べて多く描くことと報告している。

堀端²¹⁾は、幼児（年少児、年長児）と小学校3、4年生を被験者として、身体の輪郭が描かれている用紙に、色鉛筆で、身体内部を描かせる方法を試みている。彼は、小学生に比べて、幼児は、心臓や骨格の概念に関しても、

正しい知識がなく、体内器官について、まだ、
分化してないことを報告している。

以上の研究が、幼児や児童を対象とした体内
Image についての主なものであると思われる。
る。

これらの研究は、以下のような点で、共通
の見解が示されていると考えられる。

1. 幼児の体内 Image は、ある程度形成さ
れてはいるが、解剖学的なものではなく、
日常生活の経験の中から生まれてくるも
のである。

2. 体内 Image における、体内器官の数は、
年齢と共に増加する傾向がある。

3. 病気の経験は、体内 Image の形成に影
響を及ぼす。

しかしながら、これらの研究は、方法も様
々で、結果における相違点も少なくない。

先ず、方法に関して、先行研究では、質問

紙法, 面接法, 描画法の3種類が用いられて
 いるが, 幼児の場合には, 言葉の理解力, 表
 現力等が不十分であると思われるにあつて, 単
 に言葉によるコミュニケーションだけでは,
 体内Imageを正確に捉えることは困難ではな
 いだろうか。従つて, 面接法と描画法を併用
 し, 言葉での説明が不十分な幼児には, 描画
 法で補ひ, また, 描画能力の劣る幼児には,
 言葉での説明で補うという方法が望ましいの
 ではないだろうか。また, 解剖学的な器官の
 名称が, 不明瞭で, 身近な経験の範囲内での
 反応が十分考えられるにあつて, 面接法に代ける
 機能の質問も必要ではないかと思われる。

次に, 描画を行なう用紙については, 白紙
 と人間の輪郭が描かれている紙の2種類が用
 いられているが, 白紙に比べて, 人間の輪郭
 が描かれている方が, 体内器官の位置の把握
 も可能であり, 特に, 幼児の場合には, 課題
 に取りかかりやすいと考えられる。

描く用具についても, 鉛筆, 色鉛筆, クレ

ヨンが用いられてゐるが、幼児が、日頃使へ慣れてゐるクレヨンやクレパスを用ゐる方が、描きやすく、また、体内器官の色の Image についてのアプローチも可能ではないだろうか。

また、古谷と Steward¹¹⁾ は、身体の外側と内側の 2 枚の描画を行な、てゐるが、同様の方法を用ゐた岩崎²⁴⁾ も、内側の絵に移る際の前後の段階の課題として、有効であることを認めてゐる。

教示の内容については、針生¹⁹⁾の述べる様に、体内 Image と個人の personality の特性や、内的状態の反映を捉えようとするならば、

Gellert¹²⁾ のように、知、てゐるだけ、できるだけにたくさん器官の名称をあげるという教示は、不向きであり、「あなた自身の身体の中」や「思い描ける」という教示を取り入れることも重要であると思われる。

結果については、発達的に捉えようとする研究が多いためか、性差について明確に示されているものが少ないと思われ、また、性差に

ついで報告されていとも、古谷とSteward²¹⁾は、
体内器官の数について性差が認められ、
と報告し、また、彼女達と同様な方法を用
いて岩淵²⁴⁾は、男児の方が、女児に比べて、
体内器官の数と多く描くことを報告している。

また、描かれた体内器官の頻度に関して、
骨格、心臓、脳、血管、血液、胃、肺等、種
々々報告がなされている。

さらに、病気の経験が、身体内部の知識を
増加することとに異論はないが、病気の経験以
外でも、身体内部について知識に関わりが
あると思われる学習をすることも十分に考え
られる。

以上のよう、体内Imageの研究は、改善
の加えられる必要性の高いものであるとい
えられる。

第3章 本研究の目的

幼児期は、personality形成において重要な時期であり、また、personalityは、Body Imageの中核をなすものである。

従って、幼児のBody Imageを捉えることにより、personalityの基礎的側面を明らかにすることが重要であると考えられる。

幼児のBody Imageを投影させる方法の一つとして、幼児に人物画を描かせるという描画法が用いられることが多い。

このような場合には、一般に、幼児は身体の外側の絵を描き、体外Imageを投影させている。その一方で、身体の内側の絵を描かせて、体内Imageを投影させるという研究も行なわれている。

しかしながら、現在までに行なわれている体内Imageについての研究報告は少なく、その方法も様々で、結果における相違点も少なくない。

そこで、本研究は、先行研究の方法を参考

にし、それらの結果と比較すると共に、以下の
ような2点についての実験を行なうことに
より、幼児の体内Imageを捉えようとするも
のである。

1. 病気の経験、及び、身体内部について
の知識に関わりがあると思われる学習が、
幼児の体内Imageに与える影響を明らか
にすると共に、体内Imageにおける性差
についての考察を加える。

2. 体内情報の中で、特に、心臓について
の情報は、明確に捉えやすいものと思わ
れる。そこで、心臓についてのImageを
中心として、幼児の体内Imageの実態を
明らかにする。

第 4 章 実験方法

第 1 節 被験児

(1) 静岡市杉の子幼稚園園児 61 名

本研究では、幼稚園側と合議の上で、以下の条件を満たす園児を被験児として抽出している。

1. 現在までに、何らかの病気、または、怪我による手術及び、入院の経験のない園児

2. 幼稚園における病気欠席日数が多くなく、比較的健康的な園児

3. 描画という課題、実験者との会話等に支障をきたさないと思われる園児

尚、被験児数、及び、年齢等については、表 1. に示す。

(2) 国立習志野病院に入院中の幼児4名

a) 男児3名

出血性膀胱炎 (6 歳 1 ヶ月)

急性糸球体腎炎 (5 歳 6 ヶ月)

血管性紫斑病 (4 歳 11 ヶ月)

b) 女児1名

ネフロ-セ-症候群 (5 歳 5 ヶ月)

尚、幼稚園児、及び、入院中の幼児の年齢は、第1回目の実験期日の満年齢と可す。

第2節 実験期日

(1) 幼稚園児

第1回目：昭和60年8月5～10日

第2回目：昭和60年10月2～16日

(2) 入院中の幼児

昭和60年12月3日

尚、入院中の幼児は、1度だけしか実験を

行なっている。

第 3 節 実験場所

(1) 幼稚園児

杉の子幼稚園教室

(2) 入院中の幼児

病院内の会議室

第 4 節 実験用具

(1) 身体のアウトライン図

身体の輪郭が描かれている絵 (A 4 版) 2 枚と白紙 (A 4 版) 1 枚の計 3 枚である。(資料 1)

(2) クレヨン

市販されているもので、赤・黒・青・白・みずいろ・黄・黄緑・緑・橙・肌・灰・茶の 12 色である。

第 5 節 手 腕 さ

実験は、幼稚園（病院）内で、比較的静かで、人の居ない部屋で個別に行なう。

被験児は、実験者と机を向かい合って座り、課題を行なう。（図 1）

実験者は、被験児に、まず、「身体のアウトライン図」とクレヨンを与える。また、実験者は、被験児の会話、及び、描かれた体内器官の質問等のために、記録用紙を用いる。

(資料 2)

実験者は、被験児に、「身体のアウトライン図」を示しながら、以下の様子を教示を行なう。

「この絵は、○○ちゃんのからだの絵です。○○ちゃんが好きなように、このクレヨンで色をぬったり、描いたりして下さい。」

身体の外側の絵が描き終ったことを被験児に確認した後、再び、以下のようを教示を行なう。

「今度の絵は、○○ちゃんのからだの中の

陰です。○○ちゃんのかうだの中は、どんなふうにあるか、どんなものがあるのか思い浮かべて下さい。そして、このスケッチで、色をぬり、たり描いたりして下さい。」

もし、被験児が、何も描き始めない場合には、

「○○ちゃん、身体の中は何もないの？」と一度だけたずねる。

また、心臓を描いた被験児には、

「この紙(白紙)に、○○ちゃん、身体の中にある本当の心臓の陰を描いて下さい。」という指示を行なう。

実験者は、描かれた体内器官に矢印のついた線を描き、その名称を記述する。そして、その器官が、どんな仕事をするのか、どうして知っているのかという問いかけを行い、被験児の言及を記録用紙に記述する。

実験中は、被験児には、できるかぎり自由に話をさせ、陰を描かせるようにした。そのため、描画の制限時間は、設けなかった。

第2回目の実験終了後、第1回目の実験以降第2回目の実験までの約2ヶ月間、被験児が、どのような病気にかか、にか、どのような怪我をしたか、さらに、身体内部についての知識に関わりがあると思われる学習をしたか等についてのアンケートを、被験児の父兄に配布した。(資料3)

このアンケート結果に基づき、被験児60名(アンケート未回収1名を除く)と

(1) 何らかの病気、または、怪我を経験した被験児19名(以下、病気を経験した被験児とする)

(2) 図鑑や絵本の解剖図を用いて、また、父兄との会話の中から、身体内部についての知識に関わりがあると思われる学習を経験した被験児18名(以下、学習を経験した被験児とする)

(3) 病気、怪我を経験せず、また、身体

内部についての学習をしうか、に被験児23名(以下、学習、病氣と経験しうか、に被験児とする)

この2ヶ月間には、幼稚園の夏期休業が、1ヶ月含まれると共に、幼稚園のカリキュラムの中では、身体内部についての学習は行なわれていない。

尚、入院している幼児の父兄に対して、アンケートは配布していない。

第6節 スコア

(1) 外側の絵のスコア

a) 色ぬりされた部分

色ぬりされた部分の数によって1～5までの評定である。たとえば、顔・毛髪・腕・脚・衣類すべてに色がぬられている場合には5、一箇所のみのおときは1とする。

b) 付加された物

付加された物があれば、その数がスコアとなる。たとえば、目、鼻、口が加えられた場合には、3となる。

c) 使用された色数

使用された色の数によつて、1～2色の場合には1、3～5色の場合には2、6色以上は3となる。

d) 絵の完成度

ぬり残しや巧拙の度合を判定して1～3までの評定とする。本研究では、以前に、古谷とStewardと同様の方法を用いたことのある経験者1名と合議の上、判定を行なつた。

e) 外側総スコア

a)～d)までの4種のスコアを合計したものである。

(2) 内側の陰のスコア

a) 描かれた要素数

循環器・神経・筋肉骨格・呼吸器・消化器系等の要素, 及び, 情緒的表現その他を含む。描かれた要素の数がスコアとなる。

b) 系統で与えられた程度

a) の要素の解剖学的に系統で与えられた程度。1～3までの評定とする。

c) 使用された色数

外側の陰と同様に, 1～3までの評定とする。

d) 内側陰スコア

a) ～ c) までの3種のスコアを合計したものを。

第5章 結果

第1節 スコアの信頼性

本研究における，1回目と2回目の実験の信頼性を検討するために，再テスト法による信頼度係数を，外側総スコアと内側総スコアについて算出した。

その結果，外側総スコアは， $r = .327$ ($p < .05$) であり，内側総スコアは， $r = .699$ ($p < .01$) である。

本研究では，古谷とSteward¹¹⁾と同様のスコア化を用いているが，彼女らは，同一被験児に，2回以上の実験を実施しているのにもかかわらず，信頼度係数を算出していない。従って，本研究における信頼度係数を比較することは不可能である。

外側総スコアについては，本研究の信頼度係数は，決して高いものとはいえないために，外側の総スコアを実施している古谷とSteward¹¹⁾，及び，岩崎²⁴⁾の結果と比較するだけにとめておく。

一方、内側総スコアの信頼度係数は、高いものであるために、内側の総に関しても、信頼性が認められると考えられる。

第2節 外側の陰

本研究に用いた被験児は、実験者の教示を聞き、すぐに課題にとりかかっている。

自分が着ている幼稚園の体操服を描くもの(図2)、裸の陰を描くもの(図3)、また、顔を描くもの、顔の要素だけを描くもの(図4)、このように、被験児は、自由に描画を行なっている。

外側の陰のスコアは、1回目(表2.)において、全体的に著しい相違はみられない。また、2回目(表3.)において、6歳男児が、各条件ともに、いくらかスコアが高いが、1点以上の差はみられない。

色ぬりされた部分(以下、色ぬり部分とする)、付加された物(以下、付加物とする)、使用された色数(以下、色数とする)、完成度、総スコアという5つの条件における全被験児の平均値を、古谷とSteward¹¹⁾の結果(色ぬり部分: 2.95, 付加物: 1.25, 色数: 1.68, 完成度: 1.79, 総スコア: 7.69, 尚、標準偏

差は示されていない)と比較すると、本研究の結果の方が、すべての条件で、高い値を示している。

(1) 全被験児の1回目と2回目のスコアの比較

5歳女児の付加物、色数、完成度を除く、その他の条件下で、1回目のスコアに比べ、2回目のスコアが高い値を示している。

そこで、全被験児の平均値について、1回目と2回目のスコアの比較を、t検定を用いて行なう。これと3(表4)、色の完成度を除く、4つの条件、色ぬり部分($p < .01$)、付加物($p < .01$)、色数($p < .01$)、総スコア($p < .001$)において、2回目のスコアが、有意に増加していることが認められた。

(2) 年齢差

1回目のスコアに比べて、2回目のスコアが、どの程度伸びたか、即ち、増加^{註1.)}度について

註1.) 増加度 = 2回目のスコア - 1回目のスコア

て、5歳児と6歳児間の比較を行な、た。(表5)

色ぬり部分では、5歳児が、6歳児に比べ、より大きな増加度を示している。

また、付加物、完成度、総スコアについては、6歳児が、5歳児に比べ、より大きな増加度を示している。

そこで、両群間の比較にt検定を用いて行な、たところ、完成度($p < .05$)については、6歳児が、5歳児に比べ、有意に大きな増加度を示していることが認められた。

(3) 性差

増加度については、男女間の比較を行な、た。(表6)

色ぬり部分と色数については、女児が、男児に比べ、より大きな増加度を示しており、付加物、完成度、総スコアについては、男児が、女児に比べ、より大きな増加度を示している。

そこで、両群間の比較を t 検定を用いて行
な、 $t = 3$, 付加物 ($p < .05$), 臨スコア
($p < .01$) について、男児が、女児に比べ、
有意に大きな増加度を示しており、色数 (p
 $< .001$) について、女児が、男児に比べ、有
意に大きな増加度を示している。

第3節 内側の絵

本研究に用いた被験児は、全員が、内側の絵を理解してゐた。

古谷と Steward¹¹⁾の報告のように、米国の被験児が、内側の絵の中にパジャマを描いたり、別の衣服を描いたりするようなことはなく、また、岩瀬²⁴⁾らの報告のように、内側の絵を描くことを拒否する被験児もいなかった。

被験児の描画には、いかにも幼児らしい反応が示されてゐる。血管が、皮膚を通して緑色に見えるが、出血する場合には、血液は赤色であるため、血管を赤色と緑色の2色で描いたり(図5)、また、腕と脚からの出血を経験しなかったために、腕と脚のみに血液が存在すると考えてゐる被験児がゐる。(図6)さらに、毎日の食事の経験から、必ずしも、胃の中とは限らずに、腕の中にも菓子があると考えてゐる被験児もゐる。(図7)

内側の絵のスコアは、1回目(表7)、2回目(表8)において、要素数、系統にてら

れに程度（以下，系統の程度とする），使用
されの色数（以下，色数とする），総スコア
の4つの条件について，外側の総スコアに
比べて，相違がみられる。

(1) 全被験児の1回目と2回目のスコア の比較

全被験児の平均値において，色数を除く，
他の3つの条件で，1回目のスコアに比べて，
2回目のスコアが高い値を示している。

そこで，全被験児の平均値について，1回
目と2回目のスコアの比較を， t 検定を用い
て行なうところ（表9），系統の程度（ p
 $< .001$ ），総スコア（ $p < .05$ ）において，2回
目のスコアが，有意に増加していることが認
められる。

(2) 年齢差

増加度について，5歳児と6歳児の比較を
行なう。（表10）

色数について、6歳児は、増減はみられ
ないが、5歳児は、減少する傾向がみられる。
他の3つの条件では、6歳児が、5歳児に比
べ、増加度が大きい。

そこで、両群間の比較とt検定を用いて行
な、 $t = 3$ 、系統の程度 ($p < .05$) につ
て、6歳児が、5歳児に比べ、有意に大きな
増加度を示していることが認められた。

さらに、5歳児、6歳児、各群の1回目と
2回目のスコアの比較を行な、 t 。(表11)

6歳児は、色数を除く、3つの条件で、1
回目のスコアに比べ、2回目のスコアが高い
値を示している。

そこで、5歳児、6歳児、各群の1回目と
2回目のスコアの比較とt検定を用いて行な
、 $t = 3$ 、5歳児について、4つの条件
すべてに、有意な差はみられず、 t が、6
歳児は、系統の程度 ($p < .001$)、総スコア ($p < .05$) の2つの条件で、有意に増加して
いることが認められた。

(3) 性差

増加度について、男女間の比較を行な、た。

(表 12)

色数について、両群ともに、スコアの減少傾向がみられるが、男児の方が、減少が少
ない。他の3つの条件で、男児が、女児に比
べ、増加度が大きい。

しかしながら、両群間の比較をも検定を用
いて行な、たところ、4つの条件すべてに有
意な差はみられなかつたので、男女間の増加
度の差異を明瞭に示すことはできなかつた。

そこで、男児、女児、各群の1回目と2回
目のスコアの比較を行な、た。(表13)

男児は、色数については、減少しているが、
他の3つの条件で、1回目のスコアに比べ、
2回目のスコアが高い値を示している。また、
女児は、色数については減少し、さらに、要
素数も増減はみられなかつた。他の2つの条件で
は、1回目のスコアに比べ、2回目のスコア
が高い値を示している。

ろなみに、男児、女児、各群の1回目と2
回目のスコアの比較をt検定を用いて行な
うとすると、女児については、4つの条件すべ
てに、有意な差がみられるが、男児は、
系統の程度 ($p < .01$)、総スコア ($p < .01$)
の2つの条件で、有意に増加していることが
認められる。

第 4 節 病気の経験と体内 Image の形成

(1) 病気を経験した被験児の 1 回目と 2

回目のスコアの比較

病気を経験した被験児は、色数を除く、3
つの条件で、1 回目のスコアに比べ、2 回目
のスコアが高い値を示している。(表 14)

そこで、1 回目と 2 回目のスコアの比較を
t 検定を用いて行なうと、 $p < .05$ 、系統の程度
($p < .05$) にあいて、2 回目のスコアが、有
意に増加していることが認められた。

(2) 年齢差

病気を経験した被験児を 5 歳児と 6 歳児に
分類し、増加度について比較を行なう。

(表 15)

色数を除く、3 つの条件で、6 歳児が、5
歳児に比べ、増加度が大きい。

しかしながら、両群間の比較を t 検定を用
いて行なうと、 $p < .05$ 、4 つの条件すべてに有
意な差はみられず、 $p < .05$ 、5 歳児と 6 歳

児の増加度の差異を明瞭に示すことはできな
か、た。

(3) 性差

病気を経験した被験児を男児と女児に分類
し、増加度について比較を行な、た。(表16)

人数を除く、3つの条件で、男児が、女児
に比べ、増加度が大きい。

しかしながら、両群間の比較をも検定を用
いて行な、たところ、4つの条件すべてに有
意な差はみられなかつたので、男児と女児の
増加度の差異を明瞭に示すことはできなかつ
た。

第5節 学習の経験と体内 Image の形成

(1) 学習と経験した被験児の1回目と2回目 のスコアの比較

学習と経験した被験児は、色数を除く、3つの条件で、1回目と2回目のスコアに比べ、2回目のスコアが高い値を示している。(表17)

そこで、1回目と2回目のスコアの比較とt検定を用いて行なうと、系統の程度 ($p < .05$) にあいて、2回目のスコアが、有意に増加していることが認められた。

(2) 年齢差

学習と経験した被験児を5歳児と6歳児に分類し、増加度について比較を行なう。(表18)

4つの条件すべてに、6歳児が、5歳児に比べ、増加度が大きい。

そこで、両群間の比較とt検定を用いて行なうと、系統の程度 ($p < .05$)、除スコア ($p < .05$) の2つの条件で、有意に増加

してゐることが認められた。

(3) 性差

学習を経験した被験児を男児と女児に分類し、増加度について比較を行なつた。(表19)

色数については、男児は増減はみられないうが、女児は減少をしてゐる。他の3つの条件で、男児が、女児に比べ、増加度が大きい。

しかしなから、両群間の比較をも検定を用いて行なつたところ、有意な差はみられなかつたので、男児と女児の増加度の差異を明瞭を示すことはできなかった。

第6節 学習・病気を経験しない被験児の体

内 Image の形成

(1) 学習・病気を経験しない被験児の1

回目と2回目のスコアの比較

学習・病気を経験しない被験児は、系統の
程度、総スコアについては、2回目のスコア
が、要素数、色数については、1回目のスコ
アが、それぞれ、高い値を示している。(表
20)

しかしながら、両群間の比較をも検定を用
いて行なう。ところで、4つの条件すべてに、
有意な差はみられなかった。このため、1回目と2
回目のスコアの差異を明瞭に示すことはでき
ない。このため。

(2) 年齢差

学習・病気を経験しない被験児を5歳児と
6歳児に分類し、増加度について比較を行な
う。このため。(表21)

要素数については、5歳児は増減はみられ

ないが、6歳児は、減少している。他の3つの条件で、6歳児が、5歳児に比べ、増加度が大きい。

しかしながら、両群間の比較をも検定を用いて行なう。たとえ3、4つの条件すべてに、有意な差は、みられずか、こので、5歳児と6歳児の増加度の差を明瞭に示すことはできなかった。

(3) 性差

学習・病気を経験しないう被験児を男児と女児に分類し、増加度について比較を行なう。

(表22)

要素数、色数については、男児が、女児に比べ、増加度が大きい。また、系統の程度、総スコアについては、女児が、男児に比べ、増加度が大きい。

しかしながら、両群間の比較をも検定を用いて行なう。たとえ3、4つの条件すべてに、有意な差はみられずか、こので、男児と女児

の増加度の差異を明瞭に示すことはできな
か。

第7節 身体内部の要素

1回目と2回目の実験で、被験児により描かれた身体内部の要素（以下、体内要素とする）の主なものを示した。（表23）

1回目、2回目ともに、心臓、血液、胃の3つの要素が多く描かれている。次いで、多い要素は、脳、胃、腸とい、にもって、呼吸器系、泌尿器系、生殖器の要素は、ほとんどみられないが、に。また、ごはん、お菓子とい、に食物や排泄物は、解剖学的要素ではないが、被験児が、実際に描いたものである。

(1) 1回目と2回目の体内要素の比較

全被験児により描かれた1回目と2回目の主な体内要素の比較を行な、た。（表23）

心臓、血液、腎、脳を描く被験児は、1回目から2回目に増加している。また、胃、腸、食物、排泄物を描く被験児は、1回目から2回目に減少している。

そこで、各要素について、1回目と2回目

の被験児数の比較を χ^2 検定を用いて行なう。ところ、心臓 ($p < .01$)、血液 ($p < .05$)、骨 ($p < .05$)、脳 ($p < .01$) の4つの要素を描く被験児が、1回目から2回目に有意に増加し、また、胃 ($p < .05$)、排泄物 ($p < .01$) の2つの要素を描く被験児が、1回目から2回目に有意に減少してゐることが認められた。

(2) 1回目の体内要素における年齢差、性差の比較

1回目に描かれた主な体内要素を年齢別、性別に、それぞれ分類し、比較を行なう。

(表 24)

年齢、性にかかわらず、心臓、血液、骨の3つの要素が、多く描かれてゐる。

解剖学的要素については、性における著しい差異はみられなから、6歳児が5歳児に比べ、6つの要素について、多く描いてゐる。

そこで、両群間の比較を、 χ^2 検定を用いて

行なつたところ、腸 ($p < .01$) について、6歳児が、5歳児に比べ、有意に多く描いてゐることが認められた。

また、食物、排泄物という非解剖学的要素については、同様に、性における著しい差異はみられなかつたが、5歳児が、6歳児に比べ、多く描いてゐる。

そこで、両群間の比較に χ^2 検定を用いて行なつたところ、食物 ($p < .001$) について、5歳児が、6歳児に比べ、有意に多く描いてゐることが認められた。

(3) 2回目の体内要素における年齢差、 性差の比較

1回目と同様に、2回目の体内要素を年齢別、性別に、それぞれ分類し、比較を行なつた。(表25)

年齢、性にかかわらず、心臓、血液、骨の3つの要素が、多く描かれてゐる。

解剖学的要素については、性における著し

い差異はみられなか、だが、1回目と同様に、
6歳児が、5歳児に比べ、6つの要素につい
て、多く描いている。

そこで、両群間の比較を χ^2 検定を用いて行
な、たところ、勝($p < .05$)について、6歳
児が、5歳児に比べ、有意に多く描いている
ことが認められた。

また、食物、排泄物という非解剖学的要素
については、年齢差、性差はみられなか、た。

第 8 節 心臓の Image

身体の中で、もっとも大切なものは何かという問いに対して、解剖学的要素と言及する被験児が多い。しかしながら、「心臓」や「いり」と言及する被験児もいる。

1 回目と 2 回目に大切なものとして、言及された要素を示したものの、表 26 である。

大切なものについては、1 回目、2 回目ともに、心臓と言及する被験児が多いが、年齢性にかける著しい差異はみられなかった。

そこで、全被験児において、心臓と言及した被験児と、その他と言及した被験児との比較を χ^2 検定を用いて行なう。すると、1 回目 ($\chi^2 = 7.282$, $p < .01$)、2 回目 ($\chi^2 = 4.291$, $p < .05$) とともに、心臓と言及する被験児が、その他と言及する被験児に比べ、有意に多いことが認められた。

(1) 位置

心臓が、どこにあるかという問いに対して、

被験児は、自分の胸をさわり、心臓の音を確認したり、また、左右どちらにあるのかを考えたりしてゐた。

1回目と2回目と言及された心臓の位置について示したものの、表27である。

心臓の位置については、1回目、2回目ともに、年齢、性にかかわらず左胸と言及する被験児が最も多くみられた。

そこで、全被験児において、左胸と言及した被験児と、その他と言及した被験児との比較を χ^2 検定を用いて行なう。ところ、1回目、2回目ともに、有意な差はみられず、このため、左胸と言及した被験児とその他と言及した被験児との差異を明瞭に示すことはできず、このため、

今度は、左胸、右胸、胸の真中と問わすに、胸と言及した被験児と、その他と言及した被験児との比較を χ^2 検定を用いて比較したところ、1回目については、有意な差はみられず、このため、2回目については、胸と言及した

被験児が、その他を言及した被験児に比べ、有意に多いことが認められた。 $(\chi^2 = 12.547, p < .01)$

(2) 色

被験児は、非常に様々な色を用いて、心臓を描いてゐる。1回目には10色が、2回目には12色が、被験児により用いられた。

1回目と2回目に用いられた色について示したものが、表28である。

被験児が用いた色は、1回目、2回目ともに、赤、まては、肌色が多いが、年齢、性における著しい差異はみられなかった。

そこで、全被験児において、赤、まては、肌色を用いた被験児と、その他の色を用いた被験児との比較を χ^2 検定を用いて比較したところ、1回目については、有意な差はみられなかったが、2回目については、赤、まては、肌色を用いた被験児が、その他の色を用いた被験児に比べ、有意に多いことが認められた。

($\chi^2 = 6.380$, $p < .05$)

(3) 形態

心臓をまろく描いたり (図 8) , 歯車と同じでゴトゴト回っていると考えていたり (図 9) , また , ハートの形をしている (図 10) と考えている被験児がいる。

1 回目と 2 回目に描かれた心臓の形態について示したものが , 表 29 である。

心臓の形態については , 1 回目 , 2 回目ともに , まろく描く被験児が多いが , 年齢 , 性における著しい差異はみられなかった。

そこで , 全被験児において , 心臓をまろく描く被験児と , その他の形で描く者との比較を χ^2 検定を用いて行なう。たとえ 3 , 1 回目については , 有意な差はみられなかったが , 2 回目については , まろく描く被験児が , その他を描く被験児に比べ , 有意に多いことが認められた。 ($\chi^2 = 7.606$, $p < .05$)

第9節 入院中の幼児の体内Image

病気で入院してゐる幼児を対象として、実験を行ふ、に。

被験児は、男児3名、女児1名である。彼らは、すべて泌尿器系疾患である。

わずか4名という被験児数のために、幼稚園児との数値的な比較はできない。従つて、彼らの特徴だけを簡単に述べることにする。

彼らの描いた体内要素の数は、4であるが、幼稚園児にはみられず、腎臓を描き、その機能については、「おしっこをつくるところ」と言及する被験児が、1名いた。(図11)また、他3名中、2名が、膀胱(図12)、おしっこ、たま、てゐると3(図13)と、それぞれ描いてゐる。

第 6 章 考 察

外側の絵のスコアは、1回目、2回目共に、著しい年齢差、性差はみられなかった。これについては、古谷とSteward¹¹⁾、岩瀬²⁴⁾も、同様の結果を得ている。外側の絵に関しては、本研究で用いた被験児は、同じような発達段階にあると思われる。

1回目、2回目のスコアは、共に、古谷とSteward¹¹⁾のスコアに比べて、すべての条件下で、高いものであった。本研究では、被験児による多用な反応を期待するために、実験者が、幼稚園の自由時間等に、被験児と運動をしたり、遊ぶをりして、交流を殊めようと努めた。つまり、被験児が、よりくつろいだ態度で課題を行なえるような状態をつく、ことが、本研究のスコアの方が高かったのはなにかと考えられる。

外側の絵のスコアについて、2回目のスコアが、1回目よりも増加したということは、2ヶ月という間に、被験児が、確実に発達を

していることとを意味していると考えられる。

従って、身体の外側、陰を描かせることにより、幼児の Body Image の発達の一側面を捉えることが可能であると考えられる。

そこで、このスコアの増加が、年齢、性により、どのような差異があるのかを検討したところ、年齢差については、完成度で、6歳児が、5歳児に比べて、有意に大きな増加度を示している。完成度は、陰の描き方が、上手であるか否かを評価するものであり、6歳児と5歳児の Body Image の発達の差があらわれたものと考えられる。この点では、岩渕²⁴⁾の報告と一致している。

性差については、付加物、総スコアでは、男児が、また、色数では、女児が、それぞれ有意な増加を示している。Maccoby²⁸⁾は、男児が、女児に比べて、幼い頃から自らの身体を探索して見る機会を多く与えられている為に、空間能力、知覚、分析能力に優れていると述べている。このことから考えると、男児は、

目、鼻、口等の付加物を忘れずに描き、さらに、人物画というものを正確に描く技術が、女兒に比べて高いということが考えられる。

一方、女兒は、男児に比べて、多くの色を用いて、外側の陰を描いている。女兒は、男児に比べて、色についての関心が高いことが反映されたと推測される。

次に、内側の陰のスコアについて、2回目のスコアが、1回目よりも高か、たということとは、身体の内側の陰を描かせることにより、幼児の Body Image の発達の一側面を捉えることが可能であることを示唆している。そこで、このスコアの増加が、年齢、性により、どのような差異があるのかを検討したところ、年齢差では、6歳児が、5歳児に比べて、有意に大きな増加度を示したが、性差では、有意な差はみられなかった。しかしながら、内側の陰のスコアは、すべての条件下で、年齢差では、6歳児の、また、性差では、男児の増加度が大きかった。

さらに、5歳児のスコアが、1回目から2回目に増加がみられなか、この対して、6歳児の2回目のスコアが、1回目よりも有意に増加していることに関しては、5歳児と6歳児の体内Imageの発達差があらわれたと考えられ、また、6歳児は、1回目の実験が動機づけとなり、身体内部について知識に関わりがあると思われる学習と経験した結果が反映されこのことはなにも考えられる。

女兒のスコアが、1回目から2回目に増加がみられなか、この対して、男児の2回目のスコアが、1回目よりも有意に増加していることに関しては、前述したMaccoby²⁸⁾の理論の他に、HamburgとLunde¹⁷⁾は、男性が、女性に比べて様々な病気に罹りやすいことは医学的に裏付けられ明らかな事実であり、特に、10歳までの子供の死亡率は、男児の方が高く、従って、病気に対する感受性が高いと述べており、このように、男児の方が、女兒に比べて、病気にかかりやすいことから、病気の経

験が、影響を及ぼしてゐることも考えられる。
 さらに、本研究における父兄アンケートの
 中で、男児（兄）と女児（妹）とを持つ母親
 は、兄が、現在の妹と同じ年齢のときに、
 身体機能について非常に好奇心が強く、身
 体についての質問をしたり、図鑑を見たりし
 ていたが、妹の方は、全く興味を示さないと
 述べている。

以上のことから、男児は、女児に比べて、
 身体内部に対する知識を深める度合が大きい
 といふことが考えられる。

古谷とSteward¹⁾が述べるように、成人でも
 困難だと思われる身体内部の描画は、幼児に
 とっては、それ以上のものと考えられる。し
 れながら、幼児は、確かに、身体内部の理
 解を深めてゆく。

そこで、幼児が、身体内部の理解をどのよ
 うな過程により深めてゆくのかといふこと
 について、1回目の実験から2回目の実験まで
 の約2ヶ月間で、病気・怪我をした被験児、

身体内部についての知識に関わりがあると思
われる学習をした被験児，そして，両条件と
もに満たさない被験児の2群に，どのような
差異があるのかを検討したところ，病気を経
験した被験児と学習を経験した被験児の両群
は，共に，系統の程度という1つの条件があ
ったが，2回目スコアが増加していること
が認められた。

従って，病気の経験，及び，学習の経験は，
体内Imageの形成に，プロセスの観点からの影
響を及ぼすという方向性が見い出されたと考
えられる。

さらに，体内Imageの形成に，年齢差，性
差が認められたことから，前述した2群と年
齢，性による検討を加えた。

病気を経験した被験児については，年齢差，
性差共に，有意な差は，みられなかった。

本研究では，2ヶ月という間に，病気をし
た被験児を対象としているために，病後1ヶ
月以上経過している被験児も含まれている。

古谷とSteward¹¹⁾は、病後のスコアの増加が著しいと述べている。彼女らの方法は、病氣直後に幼稚園に登園してきだ被験児に、再び描画を実施するものである。

このような点から、病氣直後の描画が、情緒的な反応を含め、多様なものになると推測される。

学習を経験した被験児については、性差における有意な差はみられなか、だが、年齢差、つまり、6歳児の増加度が、5歳児に比べて有意に大きいことが認められている。

従って、1回目の実験後の身体内部についての学習が、6歳児の体内Imageの形成に影響を及ぼすことが検証されたと考えられる。

本研究においては、客観的分析の困難にある描画をより便利で、わかりやすくするために得点化を試みた。しかしながら、得点化する上でのいくつかの問題点も生まれてきた。

外側の絵のスコアの完成度については、実験者の主観もいくらかの影響を及ぼすのではな

いかとも思われる。また、外側、内側、顔の色数については、1回目から2回目に、スコアが減少するという場合もあった。色数は、3段階の評定のため、1色多く用いただけでは、スコアが増加するとは限らない。

また、病気の経験だけが、体内Imageの形成に影響を及ぼすのではない、病気の経験にもなる医師や家族との会話も影響を及ぼす要因となると考えられる。

学習に関しても、幼児同士の会話等からも身体内部の理解を深めることも考えられる。

さらに、病気、及び、学習を経験しない幼児も、いくつかの条件下で増加の傾向がみられるように、1回目と2回目共に、全く同じ実験を実施するために、いわゆる練習の効果も考慮に入れる必要もあるのではないかと思われる。

以上のように客観性に対するいくつかの疑問も生まれてきた。これらは、体内Imageを捉えようとする上で、これから課題であ

る。

さて、体内要素についてであるが、本研究の被験児は、心臓、血液、骨の3つの要素を多く描いている。

心臓については、被験児は、どうしてそのようなものを知っているのかという問いに、「音がするから」、「触るとドキドキするから」等と言及している。

内臓器官の中で、唯一、拍動音というものを発生し、絶えず動き続けている心臓は、幼児にとり、認識しやすいものではないかと考えられる。

Brumbuck³⁾は、心臓が、小学校1年生で71%の高率で描かれたこととを報告し、針生¹⁸⁾も、幼児の描く器官で、一番多いものは、心臓であると報告している。本研究でも、これらの研究結果と一致している。

血液については、ほとんどの被験児が、「こぶと血が出るから」と言及している。

日常生活において、怪我による出血を視覚

により確かめることが出来るので、幼児にと、
て、最も、知覚しやすいためではないかと考
えられる。実際に、血液の色を赤色以外で描
く被験児は、1回目より1名いたのみであるこ
とから、視覚の影響は大きいと思われる。

骨については、ほとんどの被験児が、「触
ると固いから」と言及している。被験児は、
自らの身体と実際に触りながら、身体のどの
部分にあるのかを想像して描いている。骨の
色や形態を知覚することは困難かもしれない
が、身体に至る所に固くあるものというこ
とで、触覚により確かめられる要素であり、や
はり、知覚しやすいためのものではないかと
考えられる。

体内要素の中で、心臓、血液、骨、脳、4
つの要素は、1回目から2回目に増加が認め
られ、また、胃と排泄物は、1回目から2回
目に減少が認められている。

内側の陰のスコアの要素数は、1回目から
2回目に、有意を増加を示しているが、

これらいくつかの体内要素については、幼児の明確な反応の差異が示されている。

増加している4つの要素については、病気の経験や身体内部についての学習から、体内Imageの発達が行なわれていると考えられる。

次に、減少している排泄物については、被験児の認知的な発達の方角として、実験者の要請することに対する理解度の増加として、さらに、体内Imageの形成の一つの段階として考えられる。

しかしながら、胃は、1回目から2回目に減少していることについては、被験児は、胃とは、ほとんど言及せず、¹⁸⁾「ごはんが入っているところ」、¹⁹⁾「ごはんをこきりとこる」という身近な経験の範囲内と言及していることから、胃は、は、きりとImageの中に組み込まれておらず、針生¹⁸⁾が述べるように、幼児の体内Imageの未分化性とありわされていると考えられる。

描かれた各要素において、1回目、2回目

共に、性における著しい差異は示されなかつたが、解剖学的要素については、6歳児が、また、非解剖学的要素については、5歳児が、多く描いてゐる。特に、1回目と2回目共に、腸を6歳児が、5歳児に比べて、有意に多く描いてゐる。

毎日の食事という経験以外に、視覚的にも、触覚的にも、さほど手掛りが与えられてゐない腸を描くということは、5歳児と6歳児の体内Imageの発達の差があらわれたいものがあると考えられる。

以上のことから、体内要素についても、幼児の発達の一側面を捉えることが可能であると考えられる。

また、心臓のImageについてであるが、被験児は、身体の中にも、とても大切なものは何かという問いに対して、心臓を言及することが多い。その理由として、彼らは、「止まると死んでしまうから」、「生きるため」と言及してゐる。Gellert⁽¹²⁾の報告でも、も、とも

大切な器官は何かという問いに対して、幼児は、心臓と胃と言及することが多かった。

このように、心臓を、被験児が、え、とも大切なものと考えていることから、体内要素の中で、比較的描きやすいものであると考えられる。

そこで、この心臓について、幼児がどのような Image をもっているのか検討を加えてみる。

心臓の Image について、全被験児にかける著しい年齢差、性差はみられなかった。従って幼児は、心臓については、共通の Image をもっていると考えられる。

心臓の位置については、胸と言及する被験児を、左胸、右胸、胸の真中の3群に分類することができる。実際の描画では、心臓を右側に描いているものにもかかわらず、位置の問いかけには、左側と言及する被験児がいたり、自分の左胸に心臓があることを理解しているが、描画上の位置を正しく表現できない被験

児もいる。太田²¹⁾は、幼児の自己の身体の左右の認知が、「みぎーひだり」という言葉を用いた場合には、4歳児では11%、5歳児では45%しか正確に反応できないことを報告している。つまり、幼児は、左右の認知が、正確にできているために、心臓が胸にあることが知覚されているにもかかわらず、正しく表現できない場合が多いと思われる。

心臓の色については、被験児との会話の中で、「血とつながっているから赤」、また、「身体と同じ色」と彼らは、言及している。

赤を描く被験児は、解剖図等からの知識を表現したものと考えられるが、肌色を含む他の色については、あくまでもImageによるものと思われる。

幼児の用いる色については、今後、追求すべき課題であると考えられる。

心臓の形態をまろく描くということについては、小林²⁷⁾は、幼児の描画の特徴として、単純に、手の自然な運動にとまなひ、表現の行

かわれる段階から、円を描くことに近いもの
を描くことが可能になると述べている。つ
まり、描画は、円を描くことから始まると考
えられる。従って、形態の不明瞭なものにつ
いては、幼児は、さるく描くことが考えられ
る。即ち、心臓をさるく描くということは、
発達の上にある幼児の姿をあらわしたものと
考えられる。

以上のことから、幼児の心臓についての
Image は、身体の中でもっとも大切なもので、
それは、まるい形で、胸にあり、赤または肌
色をしているといえるものである。

最後に、入院中の幼児についてであるが、
彼らは、すべて泌尿器系の疾患で入院してあ
り、医師や看護婦から、彼らが理解できる程
度の病気の説明を受けていると考えられる。

彼らの中には、幼稚園児はみられなか、大
腎臓を1名が理解しており、また、幼稚園児
では、「おし、このたまるとこ」と言及さ
れる程度の膀胱を正しく言及できるものも1

名 いた。

これらのことから、病気の経験が、身体内部の理解を深め、体内 Image の形成に影響を及ぼすことが考えられる。

第 7 章 結 論

本研究では、以下のような結論が得られた。

1. 身体の外側の描画、身体の内側の描画は、幼児の Body Image の発達を捉える一つの手段として有効である。

2. 幼児の体内 Image の形成には、病気の経験、及び、身体内部についての学習が、影響を及ぼし、さらに、体内 Image の形成の度合には、年齢差、性差がみられる。

3. 幼児の体内 Image における身体内部の要素の数は、6 歳児が、5 歳児に比べて多い。

4. 幼児の体内 Image において、知覚されている頻度の高い要素として、心臓、血液、骨が挙げられる。

5. 幼児は、心臓について、身体の中でも
、最も大切なもので、それは、円形で、
胸にあり、赤または肌色であるという
Image とも、ている。

第8章 要約

本研究の目的は、幼児の Body Image , 特に、体内 Image を捉えることにより、personality の基礎的側面を明らかにするものである。

被験児は、次の通りである。5歳男児15名(平均年齢 5;2) , 5歳女児12名(平均年齢 5;2) , 6歳男児16名(平均年齢 5;11) , 6歳女児18名(平均年齢 6;11) の計61名の幼稚園児である。

実験は、個別に行われ、被験児には、身体アウトライン図2枚、白紙1枚、及び、12色のクレヨンが与えられる。

被験児は、実験者の指示のもとに、身体の外側の陰と身体の内側の陰を描き、それぞれの陰は、一定の基準に従って、得点化された。また、内側の陰で、心臓を描いた被験児は、さらに、白紙に、心臓の陰を描いた。

その結果、以下のような結果が得られた。

1. 身体の外側の描画、身体の内側の描画は、幼児の Body Image の発達を促える一つの手段として有効である。

2. 幼児の体内 Image の形成には、病気の経験、及び、身体内部についての学習が、影響を及ぼし、さらに、体内 Image の形成の度合には、年齢差、性差がみられる。

3. 幼児の体内 Image における身体内部の要素の数は、6歳児が、5歳児に比べて多い。

4. 幼児の体内 Image において、知覚されている頻度の高い要素として、心臓、血液、骨が挙げられる。

5. 幼児は、心臓について、身体の中でも

、とても大切なもので、それは、円形で、
胸にあり、赤または肌色であるという
Image をもっている。

謝 辞

本論文の作成にあたり、次の方々にひとかたならず御世話をいただいた。ここに氏名を記して深甚の感謝を捧げる次第である。

静岡市杉の子幼稚園

井上 京園長、大里 袖先生、及び
教職員の諸氏。

習志野市やひろ学園

松村洋子園長、及び教職員の諸氏。

References

- 1) 秋本辰雄 : ボディイメージの問題 (総論 2) , 教育と医学 6月号 , 10-18 ,
慶応通信 : 東京 (1977) より引用
- 2) Bender, L. & Keeler, W.R.: The body image of schizophrenic children following electroshock therapy. Amer. J. of Orthopsychiat., 22, 335, (1952)
- 3) Brumback, R.A.: Characteristics of the inside-of-the-body test drawings performed by normal school children. Percept. Mot. Skills., 44, 703-708, (1977)
- 4) Buck, J.N.: The H-T-P technique; A quantitative and qualitative scoring manual. J. Clin. Psychol. Monogr. Suppl., 5, 37-74, (1948)
- 5) Craddick, R.A.: The self-image in the draw-a-person test and self-portrait drawings. J. Proj. Techniq., 27, 288, (1963)
- 6) Cruickshank, W.H.: Psychological considerations with crippled children. In Cruickshank, W.H. ed. Psychology of exceptional children and youth. 2nd ed. 317-318, Prentice-Hall, Inc. : New Jersey (1963)
- 7) Eiser, C. & Patterson, D.: 'Slugs and snails and puppy-dog tails'-children's ideas about the inside of their bodies. Child : care, health and development., 9, 233-240, (1983)
- 8) Federn, P.: Ego psychology and psychoses. Imago Publish Co. : London (1953) - 加藤正明 , 保崎秀夫 , 宮本忠雄 , 小此木啓吾 編 : 精神医学辞典 , 第3版 , 340 , 弘文堂 : 東京 (1979) より引用
- 9) Fisher, S.: 'Personality, body perception, and body image boundary.' In Werner, H. & Wapner, S. eds. The body percept. Random House : New York (1965) - Kane, J.E.: Personality, body concept and performance. In Kane J.E. ed. Psychological aspects of physical education and sport. 1st ed. 91, Routledge & Kegan Paul : London and Boston (1972)

- ()
- 10) Fisher, S. & Cleveland, S.E.: An approach to physiological re-activity in terms of a body image schema. Psychol. Rev., 64, 26, (1957)
 - 11) 古谷妙子 & Steward, M.S. : 「こどものからだ」 図版にみられる幼児の病氣経験と学習, 第1版, 21-57, プレーン出版 : 東京 (1981)
 - 12) Gellert, E.: Children's conceptions of the content and functions of the human body. Genetic. Psychol. Monogr., 65, 293-405, (1962)
 - 13) Goodenough, F.L.: A new approach to the measurement of the intelligence of young children. Ped. Sem., 33, 185-211, (1962)
 - 14) _____: Differences in the intelligence of school children. J. Exper. J. Psychol., 9, 388-397, (1926)
 - 15) Gorman, W.: Body image and the image of the brain. Warren, H. Green, Inc. : Missouri (1969) - 村山久美子 訳 : ボディ・イメージ心の目で見るとからだ脳, 第2版, 137, 誠信書房 : 東京 (1982)
 - 16) 浜中淑彦 : ボディ・スキーマの問題 (総論1), 教育と医学 6月号, 4-9, 慶応通信 : 東京 (1977) より引用
 - 17) Hamburg, D.A. & Lunde, D.A.: The development of sex differences. In Maccoby, E.E. ed. Stanford University Press : Palo Alto, California (1966) - 青木やよひ, 池上千寿子, 河野貴代美, 深尾凱子, 山口良枝 訳 : 性差・その起源と役割, 第4版, 46, 家庭教育社 : 東京 (1983)
 - 18) 針生 亨 : ボディ・イメージの形成についての発達的研究 - 体内イメージを中心として -, 秋田大学教育学部紀要 (教育科学), 第34集, 130-149, (1978)
 - 19) Hartley, R.E., Frank, L.K. & Goldenson, R.M.: Understanding childrens play. Calorine Zachy Laboratory : New York - 上田礼子 訳 : 子供の発達と遊び, 第1版, 2, 岩崎学術出版社 : 東京 (1978)

- 20) Head, H.: Studies in neurology. 274-279, Oxford Universities Press : Oxford (1920)
- 21) 堀端孝治 : 幼児の人体概念についての研究 , 日本心理第44回発表論文集 , 157 , (1964)
- 22) 伊藤和衛 , 大浦 猛 , 宮原 兎一 : 付I 教育基本法 , 教育原理研究 , 第12版 , 218 , 明治図書 : 東京 (1978) より引用
- 23) 伊藤 祐時 , 松村康平 , 大村政男 : 心理技術事典 , 第1版 , 105-116 , 朝倉書店 : 東京 (1977) より引用
- 24) 岩淵忠敬 , 太田鉄男 , 中島宣行 , 古谷妙子 : 幼児の身体意識についての研究 , 日本教育心理学会第23回総会発表論文集 , 276-277 , (1981)
- 25) Kane, J.E.: Personality, body concept and performance. In Kane, J.E. ed. Psychological aspects of physical education and sport. 1st ed. 91-92, Routledge & Kegan Paul : London and Boston (1972)
- 26) 桐原 侖見 : 精神測定 , 37-76 , 三省堂 : 東京 (1948)
- 27) 小林重雄 : D A M グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック , 第1版 , 10-56 , 三京房 : 京都 (1977)
- 28) Maccoby, E.E.: The development of sex differences. In Maccoby, E.E. ed. Stanford University Press : Palo Alto, California (1966) - 青木やよひ , 池上千寿子 , 河野貴代美 , 深尾 凱子 , 山口良枝 訳 : 性差 ・ その起源と役割 , 第4版 , 73 , 家庭教育社 : 東京 (1983)
- 29) Machover, K.: Personality projection in the drawing of the human figure. (A method of personality investigation) Charles C. Thomas, Publisher : Springfield, Illinois (1949)- 深田尚彦 訳 : 人物画への性格投影 , 第3版 , 12-41 , 黎明書房 : 名古屋 (1977)
- 30) Offord, D.R. & Aponte, J.F.: A comparison of drawings and sentence competition responses of congenital heart children with normal children. J. Proj. Techn. & Pers. Assess., 31, 57-62, (1967)

- 31) 太田鉄男 , 岩淵忠敬 , 中島宣行 : 幼児の身体像について , 日本心理学会第44回
発表論文集 , 417, (1980)
- 32) Schilder, P.: The image and appearance of the human body.
2nd ed. 11-211, International Universities Press : New York
(1970)
- 33) Schilder, P. & Wecksler, D.: What do children know about the
interior of the body ? Int. J. Psycho-Anal. 16, 355-360, (1935)
- 34) Scott, W.C.M.: Some embryological neurological, psychiatric
and psychoanalytic implications of the body schema. Int. J.
psychoanal., 29, 141, (1948)
- 35) Secord, P.F. & Jourard, S.M.: The appraisal of body-cathexis ;
body-cathexis and self. J. Consult. Psychol., 17, 343-347,
(1953)
- 36) Shontz, F.C.: The psychological aspects of illness and disa-
bility. 61-81, Macmillan : New York (1975)
- 37) Swenson, C.H.Jr.: Empirical evaluations of human figure draw-
ings. Psychol. Bull., 54, 431, (1957)
- 38) Tait, C.D. & Ascher, R.C.: Inside-of-the-body test. Psychosom.
Med., 17, 139-149, (1955)
- 39) 田中義和 : 子供の絵の診断的見方について 発達の意義をおさえた指導と評価を ,
現代と保育 , 第14号 , 79-94 , ひとなる書房 : 東京 (1984)
- 40) 戸川行男 , 長島貞男 , 正木 正 , 本明 寛 , 依田 新 : 性格の形成 ,
性格心理学講座 , 第2巻 , 第3版 , 216 金子書房 : 東京 (1963) より引用
- 41) Tyler, L.E.: Test of measurements. Prentice-Hall, Inc. : Engle-
wood Cliffs, N.J. (1963) - 高田洋一郎 訳 : テストと測定 , 第3版 ,
105 , 岩波書店 : 東京 (1968)
- 42) Whiting, H.T.A., Hardman, K., Hendry, L.B. & Jones, M.G.: Person-
ality and performance in physical education and sport. 46,
Henry Kimpton Publisher : London (1973)



()

- 43) 山口俊郎 : 身体イメージの発達と心の発達 , 教育と医学 6月号 , 33 , 慶応通信
: 東京 (1977)
- 44) 山内洋三 : 分裂病者のセルフレポートについて , 臨床精神医学 , 2 , (2) ,
119-126 , 国際医学出版 : 東京 (1973)



S U M M A R Y

The Study on Body Image in Young Children

Hiromitsu Takizawa

The purpose of this study is to determine the body image, especially the image inside of the body, of young children as an approach to a basic aspect of personality.

Subjects : 27 children (15 boys and 12 girls) of 5 years of age and 34 children (16 boys and 18 girls) of 6 years of age were selected as subjects.

Procedure : Every subject was given two sheets of paper on which the contour of a child's body is printed and another blank sheet of paper, together with crayons of 12 colors

The subjects were asked to draw a picture of the outside of the body on one sheet of paper and to draw a picture of the inside of the body on the other sheet. The drawings were scored according to the criterion.

Those children who drew the heart in the drawing of the inside the body were further asked to draw another picture of heart on the blank sheet of paper.

Result ; The following results were obtained ;

1. The drawings of the outside and the inside of the body are helpful in understanding of the development of young children's body image.

2. The formation of young children's image inside of the body is influenced by their experience in disease and their knowledge of the inside of the body.

The degree of the formation of the image inside of the body also differs by age and sex.

3. The children of 6 years of age drew more elements in the image inside of the body than the children of 5 years of age.

4. Heart, blood system and bone are more remarkably perceived as elements of the inside of the body than any other elements.

5. Young children perceive the heart as the most important organ of the body which is placed in the chest, and is a red-colored or a skin-colored circle.

表 1 . 幼稚園児の平均年齢及び年齢幅

年齢 群	平均年齢	年齢幅
5 歳		
男子(n=15)	5 ; 2	4 ; 10 ~ 5 ; 6
女子(n=12)	5 ; 2	4 ; 9 ~ 5 ; 6
6 歳		
男子(n=16)	5 ; 11	5 ; 8 ~ 6 ; 3
女子(n=18)	6 ; 1	5 ; 8 ~ 6 ; 4

表2. 1回目の外側スコアの平均と標準偏差

(単位: 点)

条件 群		色ぬり部分	付加物	色 数	完成度	総スコア
5歳男児 (n=15)	M	4.47	2.93	2.20	1.87	11.47
	S D	0.92	0.96	0.41	0.52	1.88
5歳女児 (n=12)	M	4.17	3.17	2.33	1.92	11.58
	S D	0.72	0.72	0.49	0.51	1.31
6歳男児 (n=16)	M	4.75	3.06	2.38	1.81	12.00
	S D	0.45	1.69	0.50	0.54	2.56
6歳女児 (n=18)	M	4.44	2.94	2.22	1.89	11.50
	S D	0.98	0.80	0.43	0.47	1.89

表3. 2回目の外側スコアの平均と標準偏差

(単位: 点)

条件 群		色ぬり部分	付加物	色 数	完成度	総スコア
5歳男児 (n=15)	M	4.93	3.80	2.67	1.93	13.33
	S D	0.26	1.08	0.49	0.46	1.80
5歳女児 (n=12)	M	4.83	3.00	2.33	1.59	11.75
	S D	0.39	0.85	0.49	0.51	1.36
6歳男児 (n=16)	M	4.88	4.44	2.75	2.06	14.13
	S D	0.34	1.79	0.84	0.25	2.09
6歳女児 (n=18)	M	4.83	3.89	2.39	2.00	12.61
	S D	0.51	1.24	0.50	0.34	1.50

表4. 全被験児の外側スコアの1回目と2回目の差の検定
(n = 61, 単位: 点)

試行 条件	1 回 目		2 回 目		t
	M	SD	M	SD	
色ぬり部分	4.48	0.87	4.87	0.39	3.190 ^{**}
付加物	3.02	1.10	3.69	1.38	3.455 ^{**}
色数	2.28	0.45	2.54	0.50	3.358 ^{**}
完成度	1.87	0.50	1.92	0.42	.690
総スコア	11.64	1.96	13.02	1.88	4.797 ^{***}

^{**}; $p < .01$, ^{***}; $p < .001$

表5. 外側スコアの増加度における5歳児・6歳児間の差の検定

(単位: 点)

条件 \ 年齢	5歳児(n=27)		6歳児(n=34)		t
	M	S D	M	S D	
色ぬり部分	0.52	0.94	0.26	0.86	1.107
付加物	0.41	1.37	0.88	1.61	1.189
色数	0.26	0.59	0.26	0.62	——
完成度	-0.11	0.64	0.18	0.46	2.023*
総スコア	1.11	2.28	1.41	2.32	.497

*; $p < .05$

表6. 外側スコアの増加度における男児・女児間の差の検定

(単位: 点)

年齢 条件	男児(n=31)		女児(n=30)		t
	M	S D	M	S D	
色ぬり部分	0.35	0.79	0.57	0.97	.957
付加物	1.10	1.51	0.20	1.37	2.395 [*]
色数	0.42	0.56	1.33	0.67	5.668 ^{***}
完成度	0.16	0.58	-0.07	0.52	1.602
総スコア	2.00	2.10	0.73	2.21	2.263 ^{**}

*; $p < .05$, **; $p < .01$, ***; $p < .001$

表7. 1回目の内側スコアの平均と標準偏差

(単位：点)

条件 群		要素数	系統の程度	色 数	総スコア
5歳男児	M	3.55	4.30	1.95	9.80
(n=15)	SD	1.47	2.90	0.76	4.24
5歳女児	M	3.07	2.87	1.73	7.67
(n=12)	SD	1.10	1.73	0.59	2.92
6歳男児	M	3.94	5.65	1.88	11.47
(n=16)	SD	1.95	3.00	0.60	5.27
6歳女児	M	3.89	5.16	1.74	10.79
(n=18)	SD	1.56	2.77	0.56	4.48

表8. 2回目の内側スコアの平均と標準偏差

(単位：点)

条件 群		要素数	系統の程度	色 数	総スコア
5歳男児	M	3.60	5.20	1.86	10.67
(n=15)	SD	1.06	2.57	0.52	3.46
5歳女児	M	3.08	3.50	1.33	7.92
(n=12)	SD	1.08	1.62	0.65	3.12
6歳男児	M	5.00	8.25	1.81	15.06
(n=16)	SD	2.28	5.12	0.54	7.72
6歳女児	M	4.11	6.83	1.83	12.79
(n=18)	SD	1.41	3.81	0.51	5.43

表9. 全被験児の内側スコアの1回目と2回目の差の検定
(n = 61, 単位: 点)

試行 条件	1 回 目		2 回 目		t
	M	SD	M	SD	
要素数	3.75	1.57	4.02	1.68	1.368
系統の程度	4.84	2.87	6.15	3.95	3.782 ^{***}
色数	1.85	0.62	1.74	0.40	1.448
総スコア	10.44	4.49	11.90	5.86	2.687 [*]

* ; $p < .05$, *** ; $p < .001$

表10. 内側スコアの増加度における5歳児・6歳児間の差の検定

(単位: 点)

年齢 条件	5歳児(n=27)		6歳児(n=34)		t
	M	SD	M	SD	
要素数	0.04	1.48	0.41	1.59	.915
系統の程度	0.52	1.89	1.94	3.06	2.078*
色数	-0.22	0.85	0	0.49	1.246
総スコア	0.26	3.39	2.38	4.59	1.972

* ; $p < .05$

表11. 5歳児及び6歳児の1回目と2回目の内側スコアの差の検定

(単位: 点)

試行 群	1 回 目		2 回 目		t
	M	S D	M	S D	
5 歳児(n=27)					
要素数	3 . 4 1	1 . 3 1	3 . 3 7	1 . 0 8	. 1 3 8
系統の程度	3 . 9 3	2 . 6 9	4 . 4 4	2 . 3 3	1 . 3 7 5
色数	1 . 8 5	0 . 7 2	1 . 6 3	0 . 6 3	1 . 3 2 1
総スコア	9 . 1 9	3 . 8 8	9 . 4 4	3 . 5 3	. 3 7 6
6 歳児(n=34)					
要素数	4 . 0 3	1 . 7 1	4 . 5 3	1 . 8 9	1 . 9 8 8
系統の程度	5 . 5 6	2 . 8 4	7 . 5 0	4 . 4 6	3 . 7 4 5 ***
色数	1 . 8 4	0 . 5 6	1 . 8 6	0 . 5 2	. 1 5 3
総スコア	1 1 . 4 4	4 . 7 4	1 3 . 8 5	7 . 7 2	2 . 6 4 1 *

* ; $p < .05$ ***; $p < .001$

表 1 2 . 内側スコアの増加度における男児・女児間の差の検定

(単位：点)

性 条件	男児(n=31)		女児(n=31)		t
	M	S D	M	S D	
要素数	0.52	1.65	0	1.36	1.319
系統の程度	1.52	2.73	1.10	2.67	.597
色数	-0.10	0.70	-0.13	0.63	.173
総スコア	1.94	4.25	1.00	4.15	.859

表 1 3 . 男児及び女児の 1 回目と 2 回目の内側スコアの差の検定

(単位：点)

試行 群	1 回 目		2 回 目		t
	M	S D	M	S D	

男児(n=31)

要素数	3.81	1.72	4.32	1.90	1.694
系統の程度	5.26	3.07	6.77	4.31	3.027**
色数	1.94	0.68	1.84	0.54	.650
総スコア	11.00	4.82	12.94	6.36	2.500**

女児(n=30)

要素数	3.70	1.42	3.70	1.37	——
系統の程度	4.40	2.63	5.39	3.50	1.989
色数	1.77	0.55	1.63	0.61	1.221
総スコア	9.87	4.13	10.83	5.18	1.236

** ; $p < .01$

表 14. 病気をした被験児の 1 回目と 2 回目の内側スコアの差の検定
(n = 19, 単位: 点)

試行 条件	1 回 目		2 回 目		t
	M	S D	M	S D	
要素数	3.63	1.30	4.00	1.11	1.162
系統の程度	4.89	2.79	6.42	3.27	2.354*
色数	1.89	0.57	1.79	0.63	.574
総スコア	10.42	4.06	12.21	4.57	1.759

* ; $p < .05$

表 15. 病気をした 5 歳児・6 歳児間の内側スコアの増加度の差の検定
(単位：点)

条件 \ 年齢	5 歳児 (n=10)		6 歳児 (n=9)		t
	M	S D	M	S D	
要素数	0	1.25	0.78	1.39	1.218
系統の程度	0.60	2.17	2.56	3.09	1.525
色数	-0.10	0.88	-0.11	0.60	.028
総スコア	0.50	3.66	3.22	4.74	1.331

表 16. 病気をした男児・女児間の内側スコアの増加度の差の検定
(単位：点)

性 条件	男児(n=12)		女児(n=7)		t
	M	S D	M	S D	
要素数	0.42	1.31	0.28	1.49	.202
系統の程度	1.58	2.47	1.56	3.41	.014
色数	-0.17	0.72	0	0.82	.446
総スコア	1.85	3.84	1.75	5.36	.046

表 17. 学習をした被験児の 1 回目と 2 回目の内側スコアの差の検定
(n = 18, 単位: 点)

試行 条件	1 回 目		2 回 目		t
	M	SD	M	SD	
要素数	3.61	1.20	4.06	1.70	1.074
系統の程度	4.78	2.71	6.33	4.07	2.149 [*]
色数	1.78	0.73	1.56	0.62	1.121
総スコア	10.17	3.93	11.94	6.13	1.554

*; $p < .05$

表 18. 学習をした 5 歳児・6 歳児間の内側スコアの増加度の差の検定
(単位：点)

条件 \ 年齢	5 歳児 (n=11)		6 歳児 (n=7)		t
	M	S D	M	S D	
要素数	-0.18	1.54	1.43	1.62	1.998
系統の程度	0.18	1.94	3.71	3.15	2.774 [*]
色数	-0.45	0.93	0.14	0.38	1.505
総スコア	-0.45	3.26	5.29	4.61	2.913 [*]

*; $p < .05$

表 19. 学習をした男児・女児間の内側スコアの増加度の差の検定
(単位：点)

性 条件	男児(n=8)		女児(n=10)		t
	M	S D	M	S D	
要素数	1.00	2.14	0	1.25	1.166
系統の程度	1.88	3.04	1.30	3.06	.378
色数	0	0.93	-0.40	0.69	.987
総スコア	2.88	4.97	0.90	4.53	.832

表 20. 学習・病気を経験しない被験児群の 1 回目・2 回目のスコアの差の検定
(n = 23, 単位: 点)

試行 条件	1 回 目		2 回 目		t
	M	S D	M	S D	
要素数	3.74	1.57	3.70	1.46	.119
系統の程度	4.52	2.92	5.17	3.21	1.165
色数	1.87	0.55	1.83	0.49	.333
総スコア	10.13	4.41	10.70	4.86	.619

表 2 1 . 学 習 ・ 病 気 を 経 験 し な い 5 ・ 6 歳 児 間 の 内 側 ス コ ア の 増 加 度 の 差 の 検 定
(単 位 : 点)

年 齢 条件	5 歳 児 (n=8)		6 歳 児 (n=15)		t
	M	S D	M	S D	
要素数	0	1. 6 9	- 0. 0 7	1. 5 8	. 9 4 4
系統の程度	- 0. 1 3	2. 1 7	1. 0 7	2. 8 1	1. 0 0 5
色数	- 0. 2 5	0. 7 1	0. 0 7	0. 4 6	1. 2 4 8
総スコア	- 0. 3 8	3. 3 4	1. 3 3	4. 3 5	0. 9 2 7

表 2 2 . 学 習 ・ 病 気 を 経 験 し な い 男 女 児 間 の 内 側 ス コ ア の 増 加 度 の 差 の 検 定
(単 位 : 点)

性 条件	男児 (n=7)		女児 (n=16)		t
	M	S D	M	S D	
要素数	0 . 1 4	2 . 0 4	- 0 . 1 3	1 . 4 1	. 3 5 0
系統の程度	0 . 1 4	2 . 6 1	0 . 8 8	2 . 6 8	. 5 8 7
色数	0	0 . 5 8	- 0 . 0 6	0 . 5 7	. 2 2 1
総スコア	0 . 2 7	4 . 1 5	0 . 6 8	4 . 1 6	. 1 9 8

表 2 3 . 要素における 1 回目と 2 回目の差の検定

(n = 6 1 , 単位 : 人数)

要 素 \ 試行	1 回 目	2 回 目	χ^2
心 臓	3 4	4 9	7 . 3 8 7 **
血 液	4 5	5 6	5 . 7 5 2 *
骨	4 0	5 2	5 . 3 4 9 *
胃	1 7	6	5 . 3 5 8 *
腸	1 0	9	—
脳	1 6	3 1	6 . 7 8 4 **
肺	1	1	. 5 0 8
食 道	7	9	. 0 7 2
肉	9	6	. 3 0 4
食 物	1 9	1 0	2 . 8 9 5
排せつ物	1 6	2	1 1 . 0 1 4 ***
その他	2 7	1 7	

* ; p < . 0 5 , ** ; p < . 0 1 , *** ; p < . 0 0 1

表 24. 1 回目の要素における 5 歳児・6 歳児間及び男児・女児間の差の検定
(単位：人数)

群 要素	5 歳児 (n=27)	6 歳児 (n=34)	χ^2	男 児 (n=31)	女 児 (n=30)	χ^2
心 臓	11	23	3.393	20	14	1.312
血 液	20	25	.060	20	25	1.902
骨	16	24	.427	21	19	————
胃	6	11	.347	7	10	.424
腸	0	10	7.474 ^{**}	5	5	.084
脳	4	12	2.289	10	6	.635
肺	1	0	.014	1	0	————
食 道	1	6	1.671	3	4	————
肉	3	6	.124	4	5	————
食 物	16	3	15.576 ^{***}	7	12	1.421
排せつ物	10	6	2.008	9	7	.461
その他	12	15		16	11	

^{**}; $p < .01$, ^{***}; $p < .001$

表 25. 2 回目の要素における 5 歳児・6 歳児間及び男児・女児間の差の検定
(単位：人数)

群 要素	5 歳児 (n=27)	6 歳児 (n=34)	χ^2	男 児 (n=31)	女 児 (n=30)	χ^2
心 臓	19	30	2.014	27	22	1.060
血 液	24	32	.073	27	29	.802
骨	20	32	3.345	26	26	————
胃	0	6	3.482	4	2	.150
腸	0	9	6.411*	6	3	.447
脳	11	20	1.312	17	14	.146
肺	0	1	.014	1	0	————
食 道	3	6	.124	4	5	————
肉	4	2	.534	4	2	.150
食 物	7	3	2.085	6	4	.036
排せつ物	0	2	.312	0	2	.552
その他	7	10		14	3	

* ; $p < .05$

表 2 6 . 心臓のイメージ：身体の中で一番大切なもの

(単位：人数)

要素 群	心臓	脳	骨	血液	食物	その他
1 回目						
5 歳児 (n=22)	1 5	1	3	1	0	2
6 歳児 (n=25)	1 8	2	2	1	0	2
男 児 (n=28)	1 9	3	1	2	0	3
女 児 (n=19)	1 4	0	4	0	0	1
全被験児(n=47)	3 3	3	5	2	0	4
2 回目						
5 歳児 (n=23)	1 6	1	2	2	1	1
6 歳児 (n=26)	1 6	4	2	0	1	3
男 児 (n=28)	1 8	3	3	1	1	2
女 児 (n=21)	1 4	2	1	1	1	2
全被験児(n=49)	3 2	5	4	2	2	4

表 27. 心臓のイメージ：位置

(単位：人数)

位置 群	左胸	右胸	胸の真中	おなか	身体の中	その他
1 回目						
5 歳児 (n=15)	5	4	0	1	3	2
6 歳児 (n=14)	9	1	0	0	2	2
男 児 (n=15)	8	2	0	0	2	3
女 児 (n=14)	6	3	0	1	3	1
全被験児(n=29)	14	5	0	1	5	4
2 回目						
5 歳児 (n=24)	9	6	5	0	3	1
6 歳児 (n=24)	10	3	4	1	3	3
男 児 (n=25)	11	5	4	1	2	2
女 児 (n=23)	8	4	5	0	4	2
全被験児(n=48)	19	9	9	1	6	4

表28. 心臓のイメージ：色

(単位：人数)

群 \ 色	赤	肌	黒	灰	青	黄	白	その他
1回目								
5歳児 (n=15)	3	5	2	0	1	2	0	1
6歳児 (n=18)	5	5	1	1	2	1	0	3
男児 (n=15)	4	6	1	1	1	0	0	2
女児 (n=18)	4	4	2	0	2	3	1	2
全被験児(n=33)	8	10	3	1	3	3	1	4
2回目								
5歳児 (n=21)	6	10	1	1	0	0	1	2
6歳児 (n=27)	9	8	2	1	1	2	1	3
男児 (n=22)	9	7	0	2	0	1	0	1
女児 (n=26)	6	11	3	0	1	1	2	4
全被験児(n=48)	15	18	3	2	1	2	2	5

表 29. 心臓のイメージ：形態

(単位：人数)

形態 群	まるい	四角	長四角	ハート形	歯車	その他
1 回目						
5 歳児 (n=17)	1 0	1	1	1	0	4
6 歳児 (n=22)	1 5	1	0	3	1	2
男 児 (n=21)	1 3	1	0	3	1	3
女 児 (n=18)	1 2	1	1	1	0	3
全被験児(n=39)	2 5	2	1	4	1	6
2 回目						
5 歳児 (n=12)	1 5	2	1	2	0	2
6 歳児 (n=23)	1 7	2	0	0	0	4
男 児 (n=26)	1 8	3	1	1	0	3
女 児 (n=19)	1 4	1	0	1	0	3
全被験児(n=45)	3 2	4	1	2	0	6

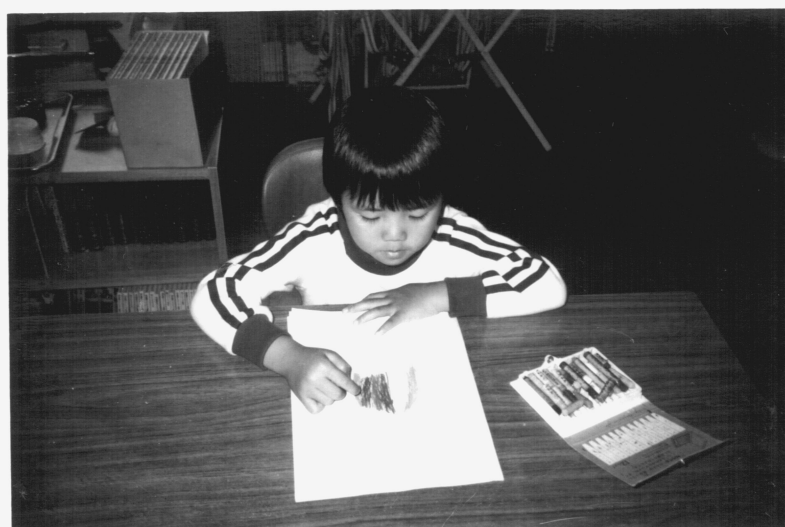


図1．実験状況

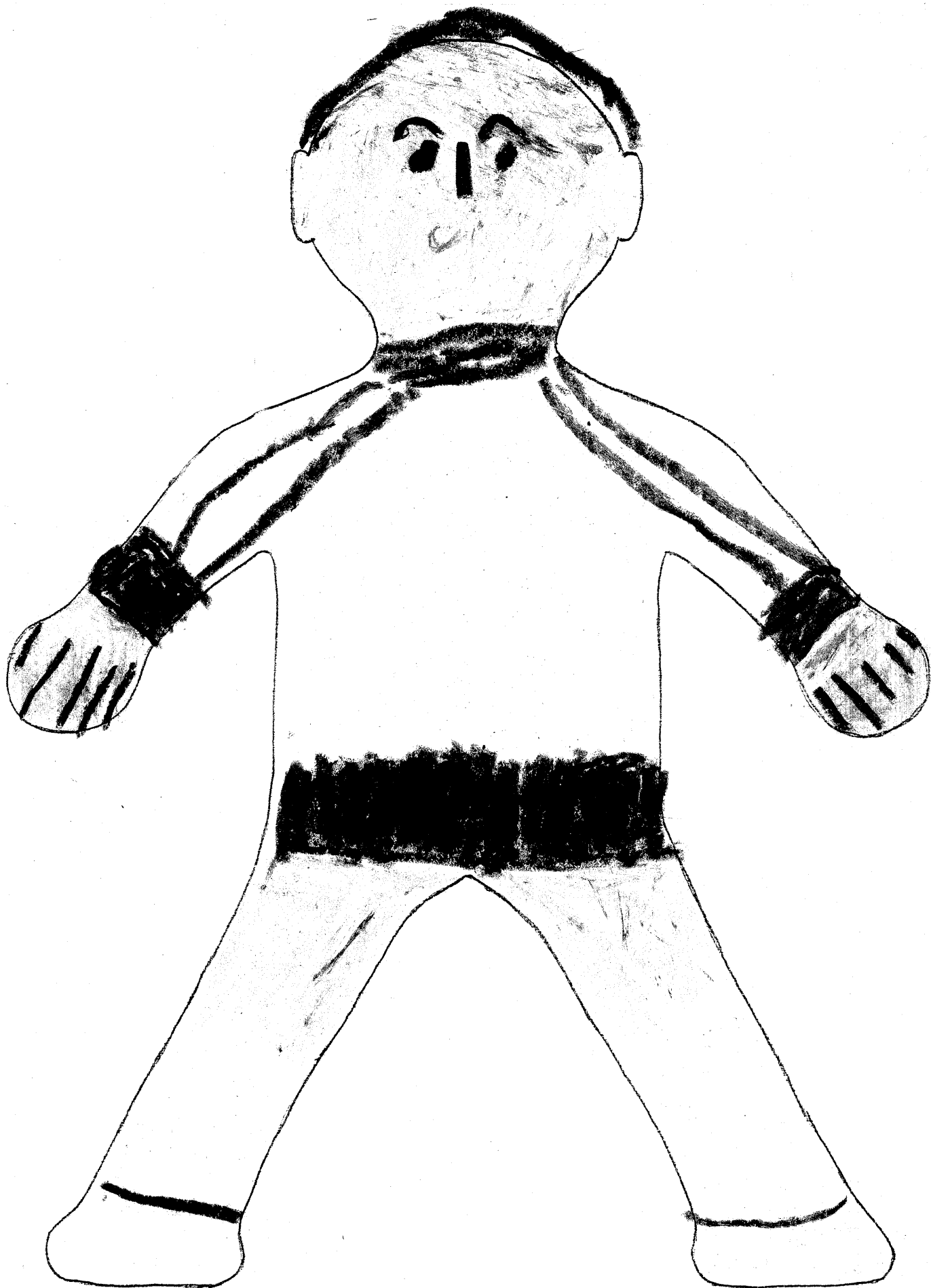


図2．体操服を描く

(5歳9ヶ月 男児)

(順天堂大学用箋)

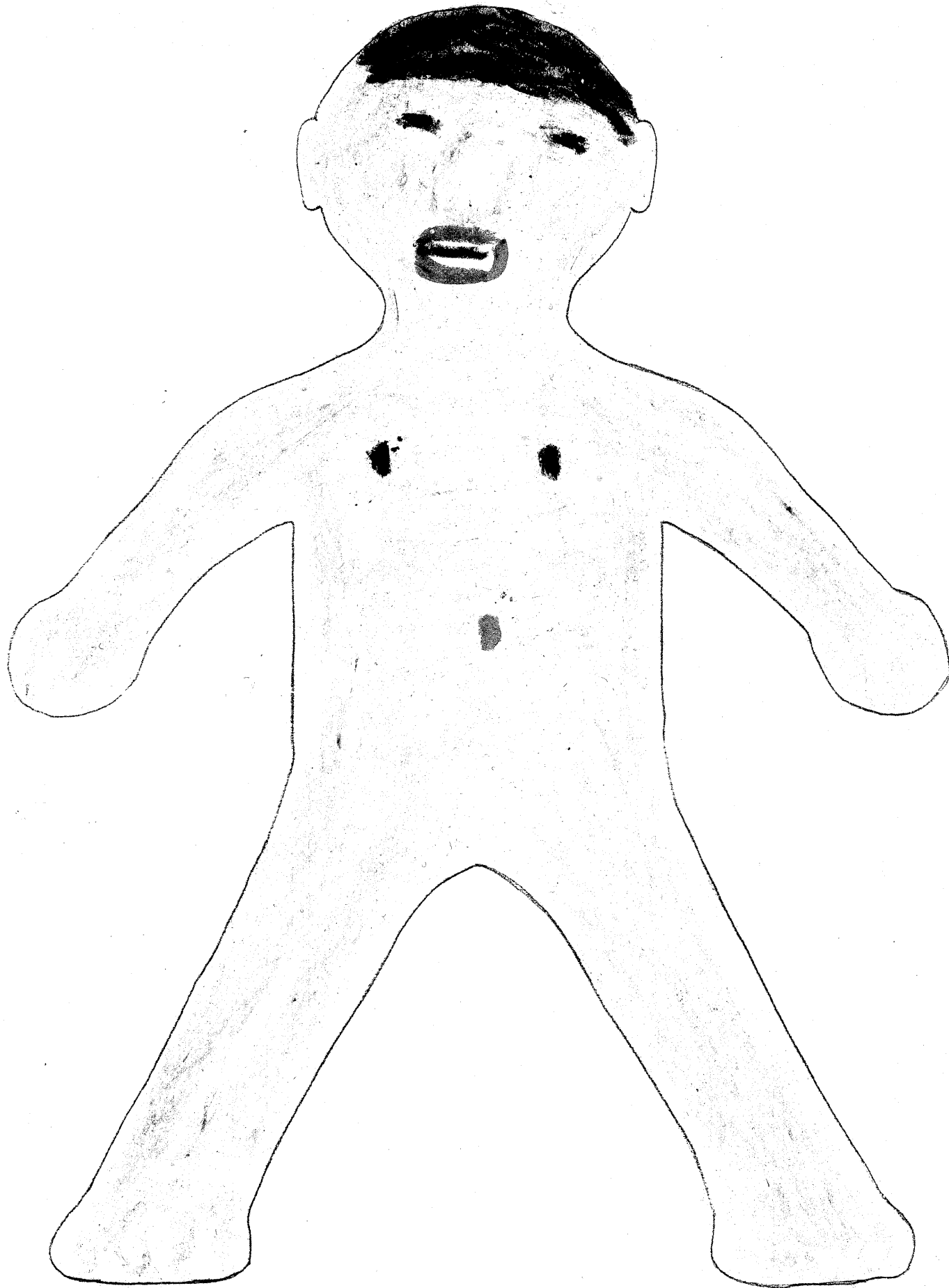


図3. 裸の絵を描く

(5歳2ヶ月 女兒)

(順天堂大学用箋)



図4. 顔をぬらない

(5歳4ヶ月 女児)

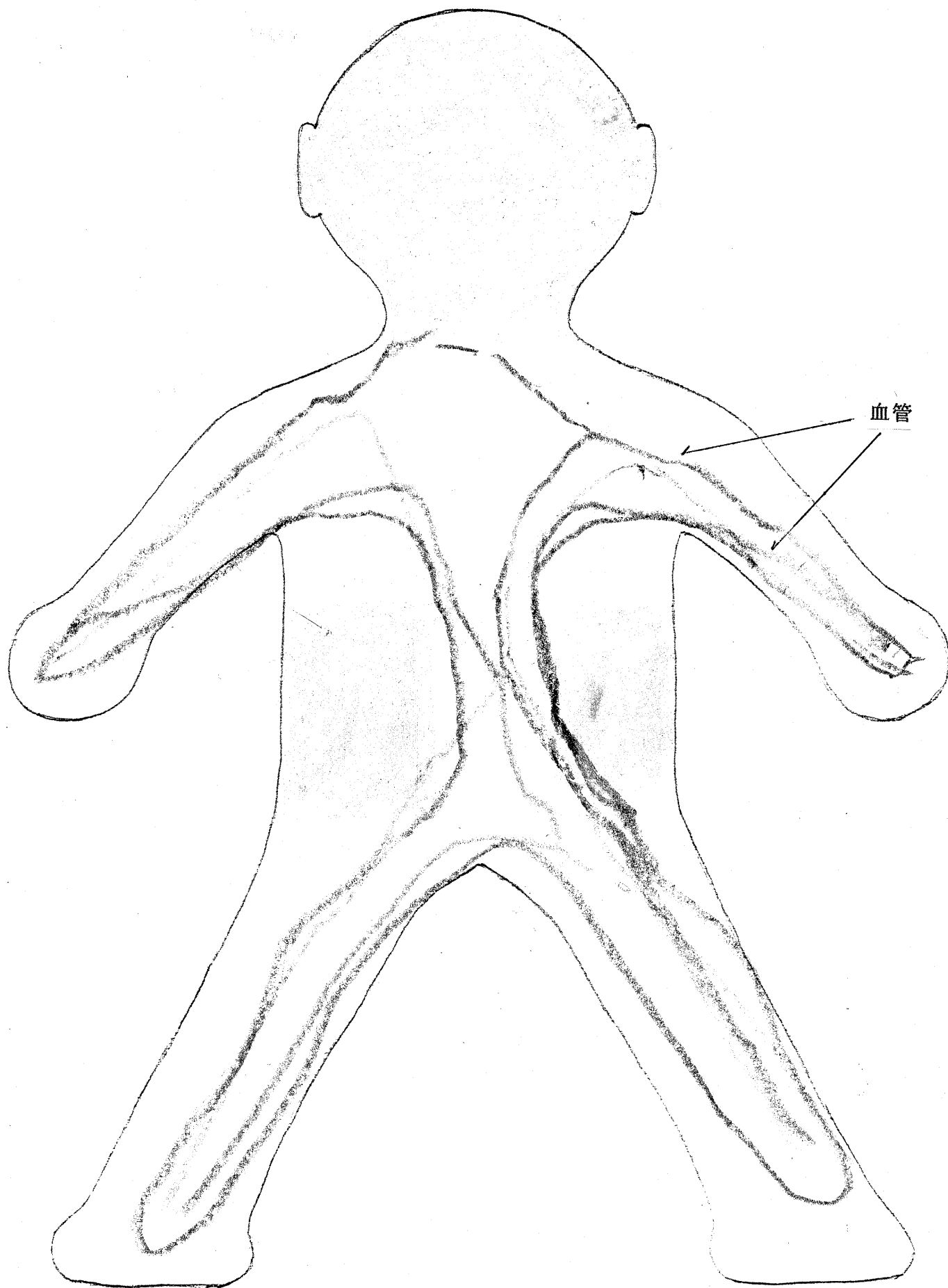


図5．血管を緑色と赤色で描く
(5歳6ヶ月 男児)

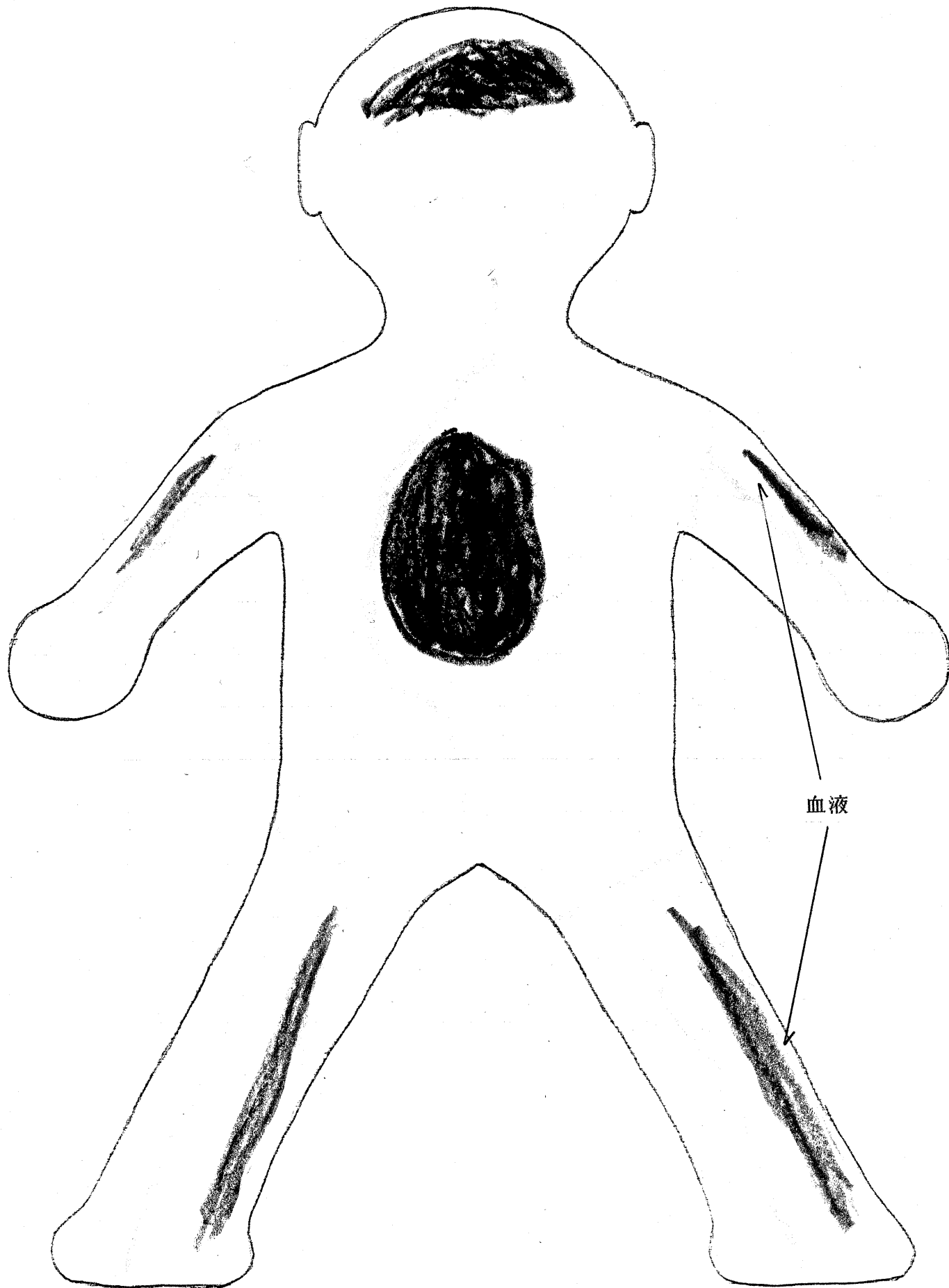


図6．腕と脚にしか血液がない
(6歳1ヶ月 女児)

(順天堂大学用箋)

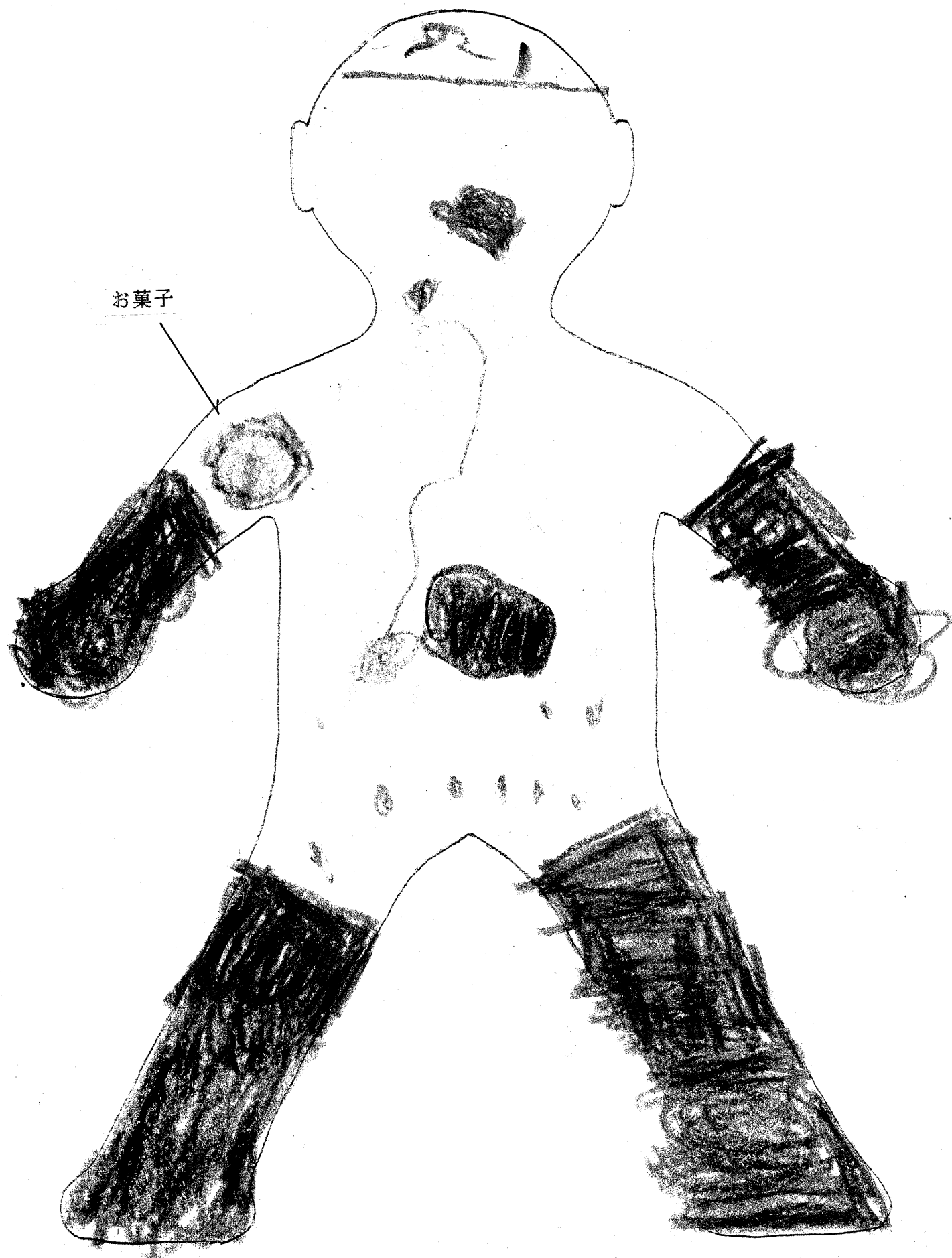


図7. 腕にお菓子がある
(5歳9ヶ月 女児)

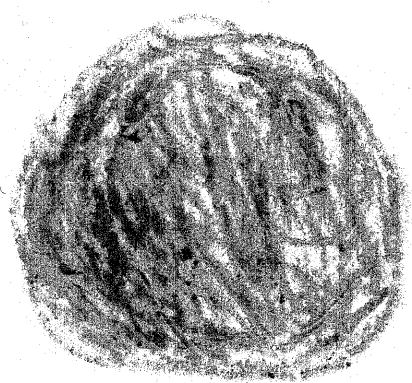


図8．心臓をまるく描く
(5歳3ヶ月 女兒)

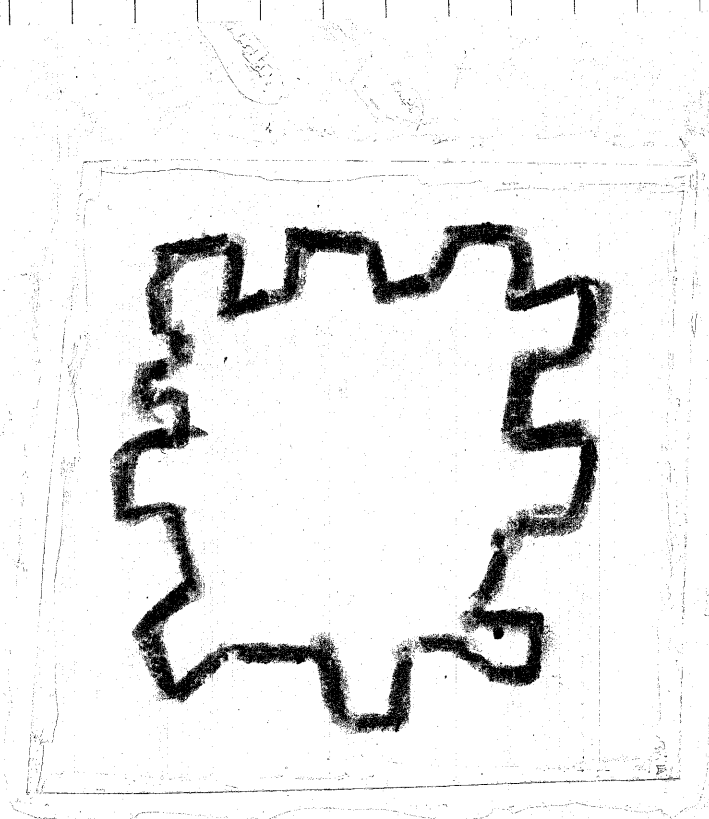


図9. 心臓は、歯車の形をしている
(6歳1ヶ月 男児)

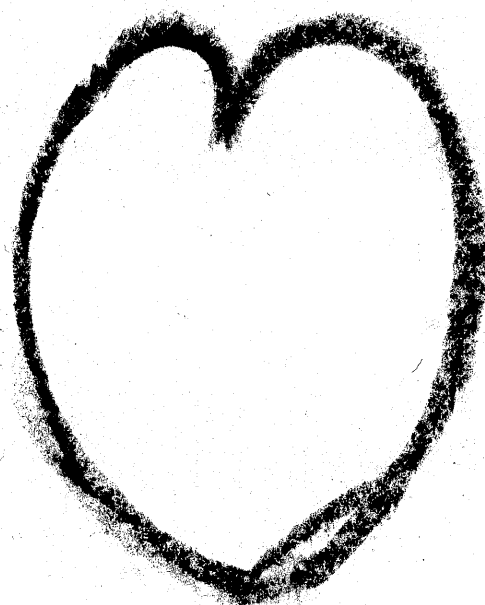


図10. 心臓は、ハートの形をしている
(5歳3ヶ月 男児)

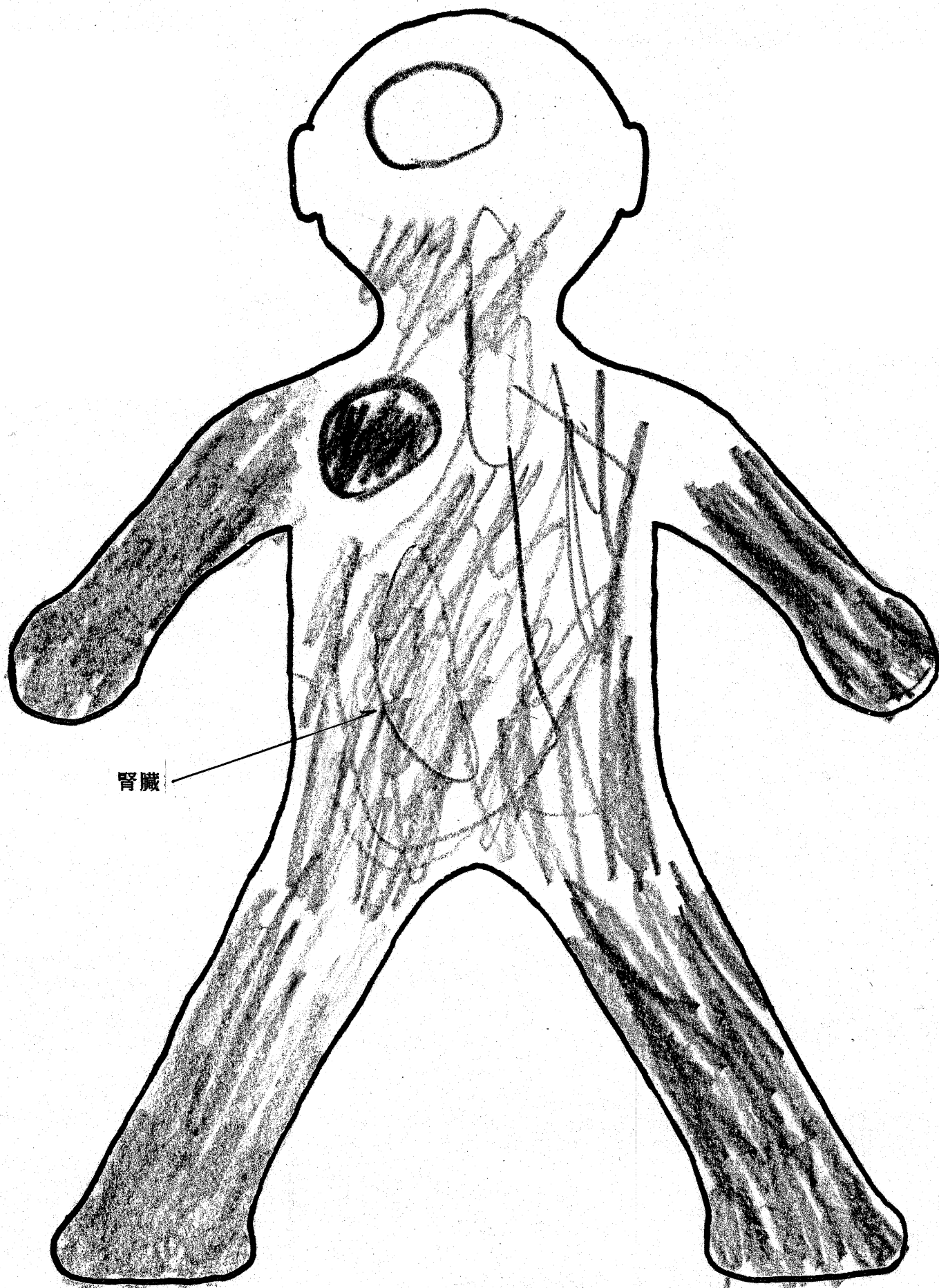


図 1 1 . 腎臓を描く

(ネフローゼ症候群 ; 5 歳 5 ヶ月 女児)

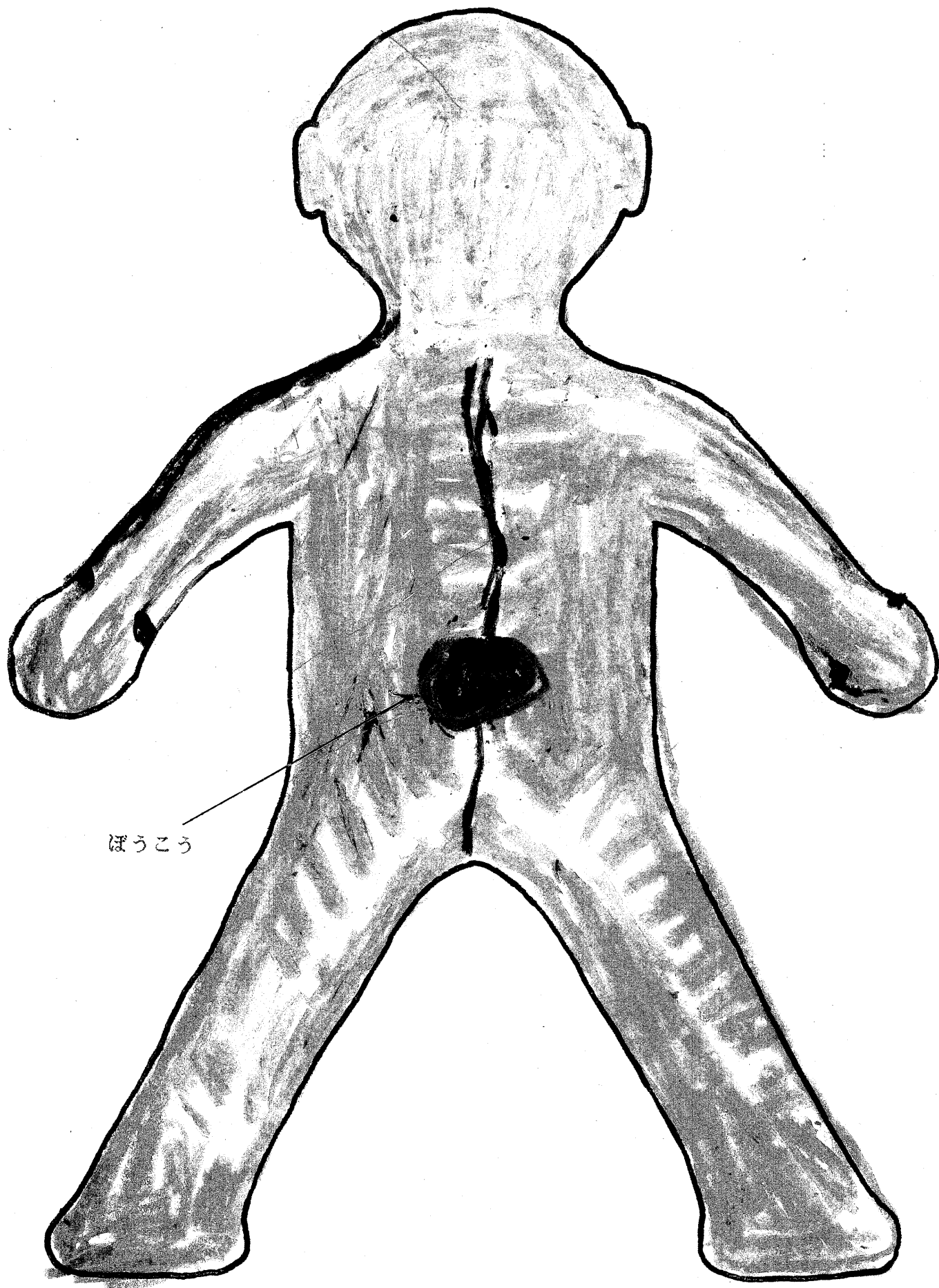


図12. ぼうこうを描く
(出血性ぼうこう炎; 6歳1ヶ月 男児)

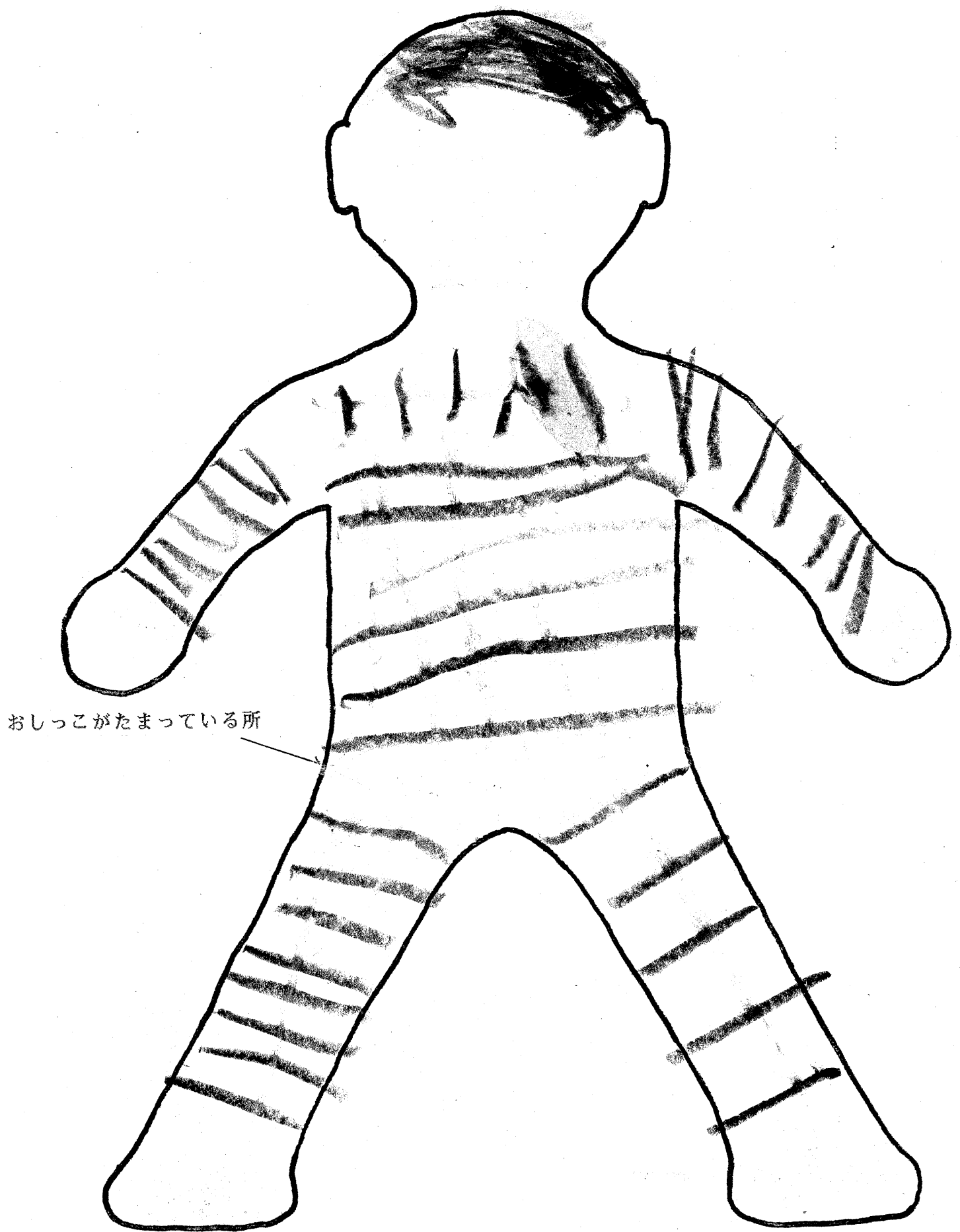
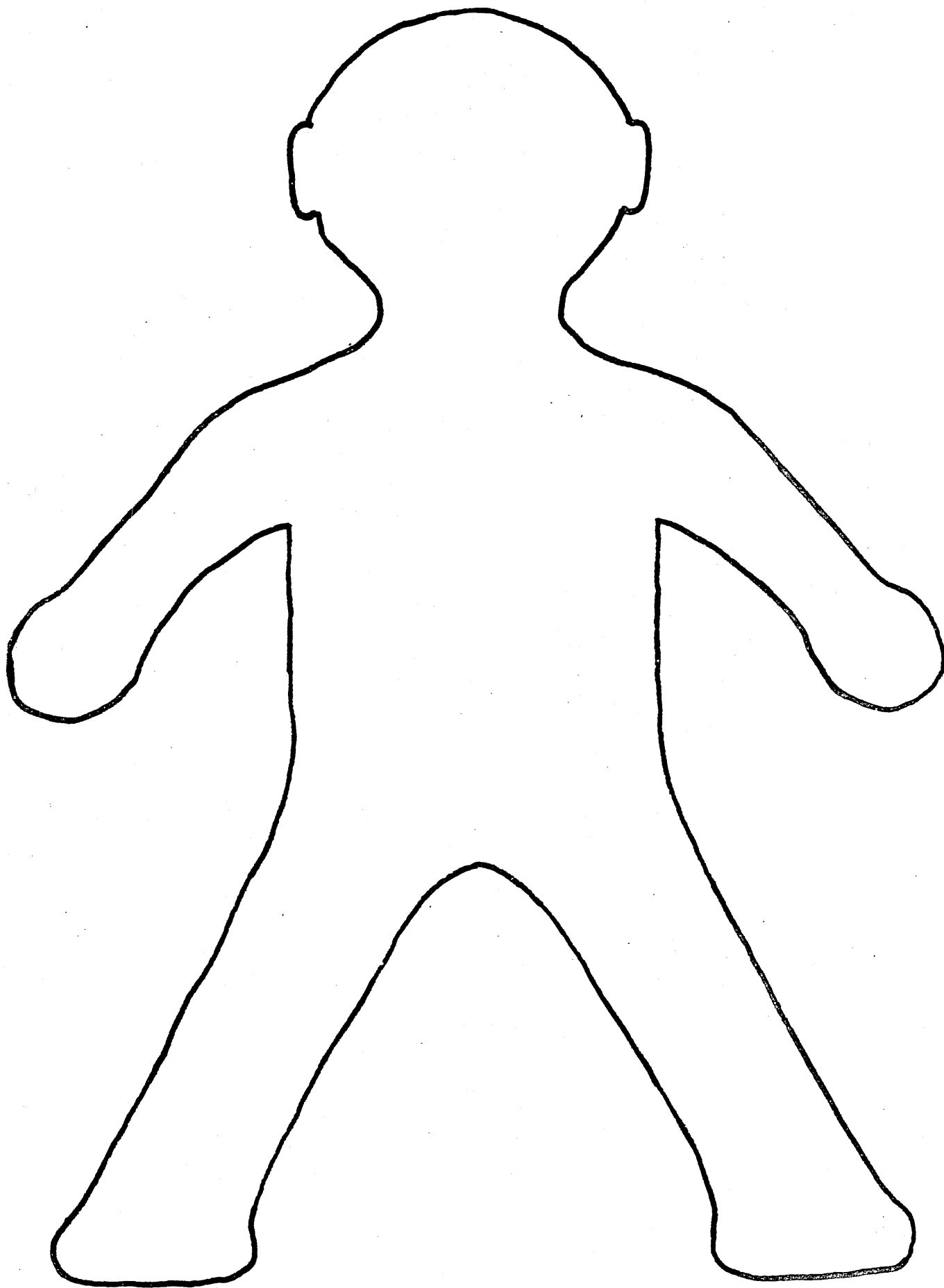


図13. おしっこがたまっている所を描く
(血管性紫斑病; 4歳11ヶ月 男児) 用箋)

資料1 身体のアウトライン図



NAME

NO. 1 外側の絵

「この絵は、〇〇ちゃんのからだの絵です。〇〇ちゃんが好きなようにこのクレヨンで色をぬったり、描いたりして下さい。」

外側の絵 所要時間 分

NO. 2 内側の絵

「今度の絵は、〇〇ちゃんのからだの中の絵です。〇〇ちゃんのからだの中は、どんなふうになっているか、どんなものがあるのか、思い浮かべて下さい。そしてこのクレヨンで色をぬったり、描いたりして下さい。」

内側の絵 所要時間 分

※もし、幼児が何も描き始めない場合は、

「〇〇ちゃんのからだの中は何もないの？」とたずねる。

Q. 1 からだの中で一番大切なものは何かな？

それは、なぜ（どうして）？

どんな色をしてるの？

資料2 記録用紙-b

(Case. 1) “心臓”と答えた場合

Q. 2 心臓は、からだのどこにあるのか思い浮かべて下さい。(左右どちらか?)

Q. 3 心臓は、どんな感じがする?

Q. 4 心臓は、どんなふうに動いてるの?

Q. 5 心臓は、どんな色をしているの?(NO. 3)

Q. 6 心臓は、どんな形をしているの?(NO. 3)

Q. 7 心臓は、どのくらいの大きさ?(NO. 3)

Q. 8 心臓は、かたいの、それともやわらかいの?

Q. 9 心臓は、何のためにあるの?(どんな仕事をするの?)

Q. 10 どうして、心臓について知っているの?

(どこかで、誰かと勉強したことがあるの?)

資料2 記録用紙-c

(Case. 2) 心臓以外のものを描いた場合

Q. 2 それは、何なの？(何という名前なのか？)

それは、何のためにあるの？(どんな仕事をするの？)

どうして、そのことを知っているの？(どこで、だれとべんきょうしたの？)

1)

2)

3)

4)

5)

(Case. 3) その他の質問

Q. 1 ○○ちゃんが毎日食べるごはんはどこへいってしまうの？

Q. 2 ウンチ、オシッコはどうして出るの？

Q. 3 ○○ちゃんは、どうして息をするの？

Q. 4 どうして、このようなことを知っているの？
(どこで、誰と勉強したの？)

お子さん及び御家族の病気又はケガについて

記入年月日 年 月 日

このアンケートは、8月（夏期保育）以降、今日までの約2か月間で、
 お子さん及び御家族の方がどのような病気又はケガをなさったかを調べる
 ものです。

お子さんの名前 _____

(1) まず、お子さんの病気又はケガについておたずねします。

1. この2か月間で、お子さんは、いつ、どんな病気又はケガをしましたか？
 また、それは、どのくらいでなりましたか？

a.	月	日頃	何という病気・ケガで	日間
b.	月	日頃	何という病気・ケガで	日間
c.	月	日頃	何という病気・ケガで	日間
d.	月	日頃	何という病気・ケガで	日間

2. 上記の病気、又はケガのとき、お子さんは身体の具合について何と申し
 ましたか？（同じ記号a. b. c. dのところに記入して下さい。）

- a. イ. 痛い（どこが： ）ロ. かゆい ハ. あつい ニ. 寒い
 ホ. 血が出た ヘ. 気持ちが悪い ト. 疲れた チ. 苦しい
 リ. その他（ ）
- b. イ. 痛い（どこが： ）ロ. かゆい ハ. あつい ニ. 寒い
 ホ. 血が出た ヘ. 気持ちが悪い ト. 疲れた チ. 苦しい
 リ. その他（ ）
- c. イ. 痛い（どこが： ）ロ. かゆい ハ. あつい ニ. 寒い
 ホ. 血が出た ヘ. 気持ちが悪い ト. 疲れた チ. 苦しい
 リ. その他（ ）
- d. イ. 痛い（どこが： ）ロ. かゆい ハ. あつい ニ. 寒い
 ホ. 血が出た ヘ. 気持ちが悪い ト. 疲れた チ. 苦しい
 リ. その他（ ）

資料3 父兄アンケートーb

3. その病気又はケガについて、お子さんは何か質問をされましたか？
もし、ありましたなら、どのような質問をされましたか？

a.

b.

c.

d.

(2) 次に、御家族がどんな病気又は、ケガをされたか質問します。

1. この2か月間で、御家族の方の中で、どなたが、いつ、どんな病気又は、ケガをなさいましたか？又、それはどのくらいでなおいりましたか？

a. どなたが	月	日頃	何という病気・ケガで	日間
b. どなたが	月	日頃	何という病気・ケガで	日間
c. どなたが	月	日頃	何という病気・ケガで	日間
d. どなたが	月	日頃	何という病気・ケガで	日間
e. どなたが	月	日頃	何という病気・ケガで	日間

2. 御家族の方が、病気又は、ケガのときに、お子さんはそれについて質問されることがありましたか？

イ. 質問した

ロ. 質問しなかった

↓

3. それはどんな質問でしたか？

資料3 父兄アンケート - c

4. 御家族の方が病気又は、ケガのときにその病気又は、ケガについて説明されましたか？

イ. 詳しく説明した ロ. 少し説明した ハ. 説明しなかった

↓

↓

5. どのように説明されましたか？

(3) 最後に、お子さんが夏期保育(1回目のアンケート)以降、今日までの約2か月間で、身体についてどのような質問をされたのかおたずねします。

(お子さん、御家族の方が病気、ケガをされた時以外で)

1. お子さんは、この2か月間で、身体の構造(例えば、食べ物はどのように消化されるか、人間はなぜ息をするのか、心臓はなぜドキドキ動いているのか等)、又身体内にどんなものがあるのか(骨、血液、心臓等)について御家族の方に質問されることがありましたか？

イ. 何度か質問した ロ. 1, 2度質問した ハ. 質問しなかった

2. お子さんは、身体の構造について、どのような質問をされましたか？

資料3 父兄アンケート－d

3. 御家族の方が、この2か月間で、お子さんといっしょに、何らかの教材を用いたりして、身体の構造について勉強なさいましたか？もし、ございましたら、どんなことを勉強したか、ご記入下さい。
